
チェンジ・スタッグビートル2～思い出に変わるまで～

blackbeat

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

チェンジ・スタッグビートル2 ～想い出に変わるまで～

【Nコード】

N3739L

【作者名】

blackbeat

【あらすじ】

園咲若菜は、ある日駅で線路に落ちたところを通りすがりの男に助けられます。

その男・須藤霧彦に一目ぼれをしてしまった若菜ですが、霧彦は若菜の姉・冴子を好きになってしまうのです。

果たして、若菜の恋の行方はいかに？

キャラクター紹介

須藤霧彦

：本編の主人公。困った人を見ると放ってはおけないタイプ。園咲若菜を駅で助けたことがきっかけで園咲家と関わることになる。

園咲若菜

：もうひとりの主人公。駅で線路に落ちたところを霧彦に助けられ、一目ぼれ。それ以来霧彦に想いを寄せる。内気で消極的だったが、霧彦への想いや姉の冴子の支えで成長していく。

園咲冴子

：若菜の姉。フラッシュメモリ大手のディガルコーポレーションで働くキャリアウーマンで、社交的な明るい女性。そんな冴子に霧彦は惹かれていく。

左翔太郎

：霧彦の親友。明るく優しい熱血漢で、街の人気者。
仲間である亜樹子に対して恋愛感情を抱き、告白するかどうか迷っている。

照井竜

：霧彦の親友。常に冷静沈着で頭も切れるが、その実は熱い男。

須藤雪絵

：霧彦の妹。若菜の弟の来人とききあっている。兄想いの優しい妹で、自分のために人生を犠牲にしてきた兄に幸せになってほしいと願っている。

園咲来人

：若菜・冴子の弟。雪絵からはフィリップと呼ばれている。
人懐っこい性格で、霧彦とも仲が良い。

鳴海亜樹子

：翔太郎の想い人。だが：

園咲琉兵衛

：若菜たちの父親。おおらかな性格で、子供たちを優しく見守っている。

光栄次郎

：琉兵衛の旧友。

井坂深紅郎

：霧彦の上司。常に的確なアドバイスを霧彦に出す、霧彦のよき理解者。

ポジティブな仕事ぶりと柔らかな物腰で女性からの人気も高い。

第1話

月曜の朝は人が多い。

園咲若菜は、そんな月曜が嫌いだった。もともと、月曜が好きだという人のほうが少数意見かもしれない。

彼女の勤務先は、自家用車で15分。

だが若菜は電車での通勤にこだわっていた。家からの自家用車でも構わないが、電車に乗ることではしか体験できないことがあるからだ。

駅のホームに立つと、若菜はいつもあの日のことを思い出す。

あの男と初めて出会った、あの日のことを。

あの日も若菜はこの駅のホームに立っていた。

それまでは自家用車での通勤だったが、その日はたまたまクルマの調子が悪く、さらに運転手が急病のため不在だった。

仕方なく若菜は電車を使うことにしたが、通勤ラッシュのためかなりの混雑。

そのうえ上り線の事故で電車は遅れ、乗り遅れた人たちが次々とホームに押し寄せた。

「何？この人たち…」

若菜は気持ちが悪くなった。

もともと人ごみが得意なほうではない。毎日自家用車で送迎してもらう若菜にとって、こんな通勤ラッシュなど無関係の世界だった。

慣れない人ごみに酔いそうになりながら、若菜は電車を待った。

10分遅れと電光掲示板には出ているが、予定の時刻になっても電車は来ない。

苛立つ利用客がさらに少しずつ増えてくる。ホームに人があふれ、飽和状態になった。

「…あっ！」

突然、若菜の後ろに立っていた女性がバランスを崩した。

そのまま若菜の方に倒れてくる。若菜はその体重をまともに受け、ホームから線路へと転落した。

「きゃあっ！」

線路に落ちた若菜は、次の瞬間こちらに向かってくる電車に気付いた。

逃げようにも緊急避難スペースは無情にも遠い。

もうだめかと目を伏せたその時だった。

向かい側のホームから一人の男が線路に飛び降りてきた。

男は若菜に駆け寄ると、彼女を抱きかかえて避難スペースへ飛び込んだ。

間一髪、電車が彼女たちのさっきまでいた線路の上を通過していく。

若菜は高鳴る心臓の鼓動を聞きながら、そして、さっきまでの恐怖とそこからの解放に我を忘れて男にしがみついた。

「…もう大丈夫ですよ、お嬢さん」

そう言った男の首には赤い模様をあしらったスカーフが巻かれていた。

「ご、ごめんなさい」

慌てて体を離れた若菜は、恥ずかしさと驚きが同居した複雑な心境のまま立ち上がろうとした。

「痛っ…」

右足に激痛が走る。

若菜は思わず足を押さえてうずくまった。

さっき落ちた時に足をくじいてしまったらしい。

「大丈夫ですか？」

男が心配そうに若菜を見る。

「はい…足をくじいたみたいで…。でも大丈夫ですから…きゃっ」
言い終わらないうちに男は若菜を背負って線路脇の梯子をのぼり始めた。

「あ、あの本当に大丈夫ですから」

「では、せめてホームまではしっかり捕まっていってくださいね」

男の言葉は、どこか安心できる空気があった。

若菜はさっきまでの恐怖心を忘れ、男に体を預けた。

が、そんな時間はあっという間に過ぎた。

既に通勤客は電車に乗って姿もまばらだ。

男は若菜をベンチに座らせ、駅員を呼んだ。

「彼女、足をケガしてますから、手当をお願いします」

それだけ言うと男は若菜に一礼をした。

「あ、あの…」

若菜は座ったまま男を呼び止めた。

「さっきはありがとうございました。…あの…、お名前は？」

「名乗るほどの者じゃありませんよ。では」

男はそのまま立ち去った。

その日から若菜は毎日電車を利用している。

あの男にもう一度会えるかもしれない…。

いや、もう一度会いたい。会ってちゃんと礼を言いたいという一心で、若菜は電車を利用している。

「はあ…」

仕事を終え、帰宅した若菜は大きなため息をついた。

「あら、どうしたの若菜。ため息なんかついて」

姉の冴子がコーヒーを入れながら聞いた。

「わかった。また例のスカーフの彼でしょ」

「ち、ちがうわよ。何言ってるのお姉様」

若菜は慌てて否定したが、凶星だった。

あの日以降彼とは会っていない。

やはりあの日、捕まえてでも名前を聞いておけばよかったと、若菜は後悔した。

彼と自分との接点はもはやあの駅しかないだけに、若菜はやりきれないものがあつた。

「はあ…」

若菜はまたため息をついた。

「冴子、若菜、ちょっといいかね」

二人の父親の琉兵衛が入ってきた。

「どうしたの？」

若菜が立ち上がって質問した。

「うむ、ちょっと紹介したい男がいてね」

琉兵衛は一人の男を招き入れた。

その姿に若菜は息をのんだ。

そこにいたのは、あの日若菜を助けてくれた、スカーフの男だったのである…。

つづく

第2話（前書き）

この作品は、「仮面ライダーW」に登場する園咲家の方々をモチーフに構築した小説です。

前作の「チェンジ・スタグビートル」同様に「チェンジ」とか言ってる割にライダーやドールパントへの変身はせず、アクションやバトルもありません。

「仮面ライダーW」の第18話での霧彦と若菜の交流からインスパイアされて作ろうと思いましたので、今作でのカップリングはフィリップ・若菜ではなく、霧彦・若菜となっています。

また、キャラクターの性格も原作とは異なります。

本来なら第1話の投稿時に書くべき事柄でしたが、遅ればせながらお話します。

第2話

「紹介しよう、須藤霧彦君だ」

琉兵衛は霧彦を紹介した。

「霧彦君、こちらは娘の冴子と若菜だ」

毅然とした冴子に対し、若菜は呆気にとられている。

「この方がどうなさったの？」

「うむ、実はな、そこの居酒屋で…」

言いかけて琉兵衛は口をつぐんだ。

「お父様、まさかまたお酒…」

「お酒はお医者様から止められているはずよ？」

二人の娘が口を揃えていきり立った。

「いや、いや、まあ、なんだ…。栄ちゃんとちょっと飲もうかと…」

栄ちゃん…の名前が出て冴子は苦笑いした。

近所で写真館を営む光栄二郎は、琉兵衛の旧友であり、理解者でもあった。

彼なら琉兵衛の体調は知っているし、大事にはなるまい…そこまで考えて冴子は顔を曇らせた。

「…って、そうじゃなくて！」

若菜も同じ気持ちだったのか、声をあげた。

「あたしたちが気になるのは…その…」

霧彦をまともに見れない若菜は俯きながら言った。

冴子が言葉をつなぐ。

「そうそう、そこにいる須藤さんという方は何者なのか？ってことよ」

琉兵衛は手を広げ二人の娘をなだめた。

「うむ、実はな、栄ちゃんと別れた後に酔っ払いに絡まれてな…」

「まあ！」

「そこへたまたま通りかかったのが霧彦君でな、ワシを助けてくれたんだよ。是非礼がしたいと思って連れてきたんだ」

その言葉が終わるやいなや、霧彦は一礼した。

「園咲さん、お礼ならさっき言っていたいただきましたから、ぼくはこれで」

霧彦の言葉に琉兵衛が反応する。

「ん？まだ何もおらん。今夜は食事を御馳走させてくれ」

「しかし…」

渋る霧彦に冴子が切り出した。

「今日は須藤さんも疲れてるんじゃないかしら？またにしたら？お父様」

にっこり笑う冴子に霧彦は一瞬見とれてしまう。

が、すぐに我に返ると、

「と、とんでもない。ぼくはたまたま通りすがっただけで…。し、失礼します」

「じゃあ、せめて連絡先だけでも教えてくださらない？お父様を助けてくださった方ですもの、このままサヨナラというわけにはいきませんわ」

冴子がいたずらっぽく笑う。

霧彦は渋っていたが、やがて頷くと、電話番号を書いたメモを渡した。

「じゃあ、また連絡いたしますわね、須藤さん…」

冴子は若菜にウィンクし、メモを渡した。

「では、ぼくはこれで…」

霧彦は一礼して立ち去った。

「また会えるのを楽しみにしているよ、霧彦君」

琉兵衛が霧彦の肩に手を置き、別れを告げた。

霧彦が帰った後、冴子が若菜の部屋へやってきた。

「若菜、あの人が気になるみたいね」

「…な、何言ってるのよ」

「もしかして、須藤さんじゃない？あなたを助けてくれたの」

ドキッとした若菜が息をのんだ。

「図星ね…。じゃあ、尚更よかったじゃない。須藤さんへの連絡よろしくね」

「えっ…ちょ…お姉様っ…」

笑って冴子は出て行った。

手元には霧彦の電話番号を書いたメモ。

現在、若菜の知る彼の情報は名前とこの電話番号だけ。

素行も人となりもわからない。

…いや、わかっていることがもう一つ。

あの霧彦の端正な顔立ち……これだけは若菜は深く心にとどめようと
考えていた。

つづく

第3話

須藤霧彦は園咲の家を後にして、自宅に戻った。

4畳半のアパートが彼の下宿だ。

「おかえり、お兄ちゃん」

妹の雪絵が出迎えた。

「遅かったね」

「ああ、ちよつと人助けをね」

「また？お兄ちゃんも好きね」。前にも駅のホームから落ちた女の人助けてなかった？」

そういえばそんなことがあったなと霧彦は記憶を辿った。

あの日はたまたま仕事が早番だった。

いつもより早い電車に乗ろうとしたら、向かいのホームから人が落ちた。

気がついた時には飛び出していた。

その女性が無事だったことまでは覚えているが、霧彦自身は遅刻してしまい、会社で怒られたことのほうが印象深い。

「ね、明日休みでしょ？会わせたい人があるの」

「彼氏かい？」

霧彦は笑って言った。

雪絵が顔を赤くしながら頷く。

「そうか。よかったな。いい奴なのか？…あ、いや会ってからの楽しみにしておこう」

霧彦は笑いながらテーブルについた。

食事を摂りながら、霧彦は今日会った二人の姉妹を思い出していた。

「どうしたの？お兄ちゃん」

雪絵が霧彦を覗き込んだ。

「なんでもないよ、雪絵」

両親を早くに亡くし、それからはずっと兄妹二人で生きてきた。

共に社会人となり、少しずつ余裕が出てきたものの、もともと貧乏性な二人の部屋には必要最小限のものしかない。

だがそれでも二人には十分だった。

「園咲家か…」

およそ考えられるありとあらゆる贅を尽くした家。

そこにいた二人の美しい姉妹を思い出し、霧彦はまたふっと笑った。

翌日。

若菜は自室で冴子の書いたメモを弄っていた。

「若菜、入るわよ」

冴子がドアを開けて入ってきた。

「なあに？ まだ悩んでるの？」

若菜の手のメモを見て冴子があきれたように言った。

「簡単なことじゃない。連絡するだけでしょ」

「だったらお姉様がやってよ…。あたし、なんだか恥ずかしくて照れながら若菜は言った。

「はあ？ 何言ってるのよ。全然知らない人なんだから、どう思われたって平気でしょ」

「全然知らない人だからこそ、印象が大切なのよ」

若菜はまたため息をついた。

「もう、仕方ないわね。私が連絡するから貸して」

業を煮やした冴子が若菜のメモを掴んだ。

「ちよっ…やっぱりあたしがやるから！」

若菜が慌ててメモを冴子から掴んだ。

冴子はふふっと笑って若菜の肩に手をやった。

「じゃ、頼んだわよ」

言い残して部屋を出た冴子に、いくばくかの軽い嫉妬を覚え、若菜はため息をついた。

自由闊達な姉に比べ、引っ込み思案な自分の矮小さを思い知らされた気分が若菜に冴子への軽い嫉妬となったのだろう。

若菜の部屋を出た冴子にとっても、この件は若菜の気持ちを変えるきっかけになると考えていた。

「須藤霧彦か…」

冴子は霧彦の顔を思い出していた。

なかなかの男前だったと回想し、そんな彼が若菜と深い仲になった未来を空想して苦笑すると、すぐに自室へと戻った。

つづく

第4話

翌日。

霧彦は、妹の雪絵に連れられて、駅前のカフェに来た。

雪絵の彼氏とされる人物との待ち合わせだ。

霧彦は、どんな男であろうと祝福するつもりだった。

自分以外に雪絵の価値を認め、大切にしてくれる男ならば、雪絵にとっても素晴らしい話だ。

「あ、こっちこっち！」

雪絵が立ち上がって、手を振った。

霧彦も立ち上がってその方向を見る。

「こ、こんにちは」

おずおずとしながら、一人の青年が現れた。

「やあ」

霧彦はそのまま挨拶すると、雪絵の隣のイスを促した。

「彼は、園咲来人：私は、フィリップくんって呼んでるんだけどね」

雪絵は、フィリップというあだ名の青年の隣でにこやかに言った。

「よろしく…雪絵の兄の霧彦です」

「はじめまして」

フィリップは、気さくに手を差し出した。

笑顔で霧彦もフィリップと握手をする。

「驚いたよ。雪絵にこんな素敵な彼氏がいたとはね」

「まあ」

雪絵は頬を赤らめた。

霧彦の言葉は、社交辞令ではない。

まだほとんど言葉を交わしていないが、フィリップの外見から漂う
雰囲気は、霧彦にとって好感が持てた。

「雪絵とは、いつからなんだい？」

「はい…半年になります」

雪絵につられるようにフィリップは伏し目がちに言った。

「そうか…すぐに紹介してくれたらよかったのに」

「私もそう言ったんだけどね。フィリップくんが…」

「はい。真剣に雪絵さんと未来を考える覚悟ができるまでは…と思
いまして」

フィリップは目を上げて霧彦を見据えた。

その視線に霧彦はますますこの若者を好きになった。

「で、その覚悟はできたのかな？」

「はい」

まっすぐなフィリップの視線に霧彦は思わず息をのんだ。

本気だ…。

霧彦は気持ちを切り換えた。

「君が本気だというのは、十分わかったよ」
フィリップは霧彦の次の言葉を待っている。

「雪絵を頼む。君なら、安心して任せられるよ」

霧彦の偽らざる本心だった。

同時にフィリップと雪絵の顔がぱっと明るくなった。

「ありがとうございます！」

フィリップは再び立ち上がって霧彦に最敬礼した。

「オイオイ、やめてくれよ」

霧彦は少し照れながらフィリップを見た。

と、その直後霧彦はあることに気付いた。

「そのざき…?」

雪絵はフィリップを園咲来人だと紹介してくれた。

霧彦の脳裏に、あの美しい姉妹の姿が蘇る。

「ど、どうしました?」

「ああ、いや、なんでもないよ」

霧彦は冴子の顔を思い出して、意味もなく赤面した。

次の瞬間、突然霧彦の電話が鳴った。

「あ、どうぞ、出てください」

フィリップに促され、霧彦は携帯を開いた。
見覚えのない電話番号だ。

訝りながら、霧彦は電話に出た。

「もしもし」

『あの…須藤霧彦さん…でしょうか?』

どこかで聞いたような声だった。

「そうですが…あなたは?」

『園咲です…』

つづく

第5話

若菜にとって、そのコール音が続く間は無限にも感じられた。

出なかったらどうしよう。

いや、出てくれないほうがいいのかもしれない。

そんな思いを巡らせながら若菜はコール音を聞いていた。

『はい』

霧彦の声が受話器から聞こえる。

若菜の心臓はまさに喉から飛び出しそうだ。

「あ、あの…園咲です」

やっこの思いで口にする。

声はうわずっていないなかっただろうか。

若菜は平静を装った。

『ああ、園咲さん』

霧彦の快活な声が響いた。

怪しんでいた先ほどの声と違い、警戒心を解いた声に、若菜は嬉しくなった。

「は、はい。園咲です。あの…須藤…さん」

『はい？』

「前にお話した件…覚えてらっしゃいます？…あの…父が…」

霧彦の声のトーンがまた変わった。

『ああ、その件でしたら、本当におかまいなく。ぼくも気を遣いますし』

霧彦はどうやら本気でそう思っているようだ。

だが若菜はここで退くこともできなかった。

「そんな…。それではこちらの気がすみません。それに、あたしも…」

言いかけて若菜は口をつぐんだ。

「あ、いえ、なんでもないんです」

『…？』

霧彦が不思議そうな間を開けたのがわかった。

『わかりました』

その霧彦の言葉は若菜にとっては意外なものだった。

『でも今夜はだめです。来週でしたら、ぼくも空いてますから、ま

た連絡もらえますか』

「えっ本当ですか？」

若菜は自然と顔から笑みがこぼれた。

「では、来週また連絡します。…あの、須藤さん」
『はい？』

切りかけた電話を持ち直す霧彦の所作が感じられた。

「あたしのこと…覚えてます？」

『…？ ええ、もちろん。園咲さんの…妹さんのほうですよ？』

「はい、そうです」

答えながら若菜は、悲しくなった。

あの日、駅で足をくじいた自分を助けてくれた霧彦を若菜は忘れたことがなかった。

しかし霧彦はそんな若菜を覚えていない。

と同時に、若菜は自分を声だけで「園咲の妹」だと認識してくれていることに

少し嬉しくもあった。

『では、連絡をお待ちしています』

霧彦はそう言って電話を切った。

ただ単に予定を聞いただけの御用聞きなのに、若菜は心臓がドキドキしていた。

「電話終わった？」

その様子を見ていたかのようなタイミングで、冴子が現れた。

「お、お姉様？見てらしたの？」

恥ずかしさで若菜は顔が真っ赤になった。

「まあね。若菜にしては、よく言えたじゃない。霧彦さんは何て？」
もう下の名前で呼んでいる冴子に若菜は軽い嫉妬を覚えた。

「…来週だったら、あいてるって」

「じゃあ、今度は私が連絡するわ。電話番号のメモちょうだい」
「だ、だめよ。あたしが連絡するって言ったんですもの」

不意に冴子は笑い出した。

「ふふふっ…、ムキにならないで。冗談よ」

「お姉様…」

「いい機会じゃない。内気だったあなたが、ここまで踏み出せたのは素晴らしい進歩よ」

確かに若菜は霧彦と話すために勇気を振り絞った。

だがそんな勇気がなくとも冴子なら難なく霧彦と話せるだろう。

「ところで、来人だけど、今夜は外で食べるみたいよ」

冴子が去り際に言った。

弟の来人に彼女ができたことは、若菜も知っている。

だが、その彼女の兄が須藤霧彦であることは、まだ冴子も若菜も知らなかった。

つづく

第6話

翌日の月曜、霧彦はいつものように会社へ出社した。

霧彦は電子部品を扱う部署で渉外を担当していた。

パソコンを起動すると少しずつ自分の体が仕事モードになっていくのがわかる。

休み中にたまったメールを処理する間にたちまち時間が過ぎた。

「須藤さん、お客様です。ディガルコーポレーションさん」

「あ、はい」

時計を見ると11時だった。

ディガルコーポレーションは、フラッシュメモリ開発で急成長を遂げた会社で、今日はその担当と新製品開発の打ち合わせをする予定だった。

霧彦は、コーヒーを二つ用意すると、応接室に入った。

「お待ちせしました…あっ」

霧彦はその担当者を見て驚いた。

そこにいたのは、園咲冴子だったのだ。

冴子もまた、霧彦の姿に啞然としている。

「あ…えっと…、どうぞ」

霧彦はコーヒーを冴子の前に置き、自分も着席した。

「まさか須藤さんがここの担当だったなんて…。アポをとった時には全く気付きませんでしたわ」

「そうですね…世の中は狭い…」

霧彦は苦笑しながらコーヒーを口に運んだ。

冴子の服装はピンクのスーツに胸にバラをあしらったブローチ。

薄い化粧が、冴子の美しさを際立たせ、霧彦は思わず目を奪われた。

「須藤さん？どうしました？」

「あ、す、すいません…打ち合わせを始めましょう」

慌てて霧彦は書類を取り出し、冴子に渡した。

自分の目線が冴子の脚や胸元に向かっていることを気取られまいと、霧彦は無難に話をこなした。

「須藤さん、もしよろしければ、お昼ご一緒しませんか」

会談が一段落し、冴子が提案した。

「え？ええ…喜んで」

霧彦は内心大喜びしていた。

このまま別れるのは少し惜しいという気持ちになっていたからだ。

昨日の若菜からの電話を承諾したのも、もう一度冴子に会えるかもしれないという期待があったからだった。

それがこんなに早くチャンスがくるとは。

二人は、近くにあるカフェレストランにやってきた。

「いい店を知ってるんですね。彼女さんと来てるんですか？」

「ハハ…まさか」

突然の冴子の言葉に少々驚きながら霧彦は返した。

「え？じゃ、霧彦さんは今彼女いないの？」

いつの間にか冴子の呼び方が霧彦さんになっていることに気付きながら霧彦は頷いた。

「いませんよ」

「そうなんだ。実はね、妹の若菜が霧彦さんカッコイイねって言うてたから、絶対彼女いるって思ってたんです」

「若菜…さんが」

言いながら霧彦は少し残念だった。

冴子は自分をどう見ているのか。

「あ、あの…さ、冴子…さん」

「ん？なあに？」

霧彦さん、と向こうが呼んできたのなら、こちらでも冴子さんと呼んでみよう。

案外スンナリと冴子は受け入れた。

もしかしたら、そのあたりはあまり気にしない人なのかもしれない。

「また妹から連絡あると思うけど、若菜が会いたがってるから是非いらして」

「その…冴子さんもいらっしゃるんですか？」

うわずった声で霧彦が尋ねた。

「ええ、もちろん」

笑顔で話す冴子に、霧彦も笑顔になった。

食事が終わる頃には、霧彦はすっかり冴子と打ち解けていた。

「そうだ…冴子さん、アドレス聞いていいですか」

別れ際に霧彦は思い切って聞いてみた。

だが冴子は、少し困った顔になり、笑って首を横に振った。

「霧彦さん、アドレスはもう少し仲良くなってからにしましょう。会社での取引もあるし、連絡をとる手段はいくらでもあるわ」

急ぎすぎたか…と霧彦は思い直し、冴子の言葉に頷いた。

それから霧彦と冴子は、それぞれの社に戻る帰路についた。

冴子と別れ、自分の机に座り霧彦はさっきまでの時間を思い返した。

「冴子さん…」

彼女の美しい姿を思い出して、霧彦は思わず顔がニヤけてしまうのをこらえるのに必死だった。

つづく

第7話

その日の仕事を終えた霧彦は帰宅の途についた。

電車の窓を流れる景色を見ていた霧彦の携帯電話にメール着信を告げる振動が発振する。

携帯電話を開いた霧彦は、メールを確認すると次の駅で降りた。自宅のある駅の1つ手前の駅だ。

霧彦は電話を開くと、雪絵に連絡を入れた。

「雪絵か？ ちょっと寄り道して帰るから、ご飯は食べておいてくれ」
『うん、ちょうどよかった。私もフィリップくんと食べて帰るから』

たまに雪絵が外食していたのはこういうことだったのか、と今更ながら霧彦は思った。

妹の変化すらも見抜けない眼力のなさを考え、霧彦は苦笑しながら1軒のバーに入った。

「よお、こっちだこっち」

バーのカウンターで二人の男が飲んでいる。

そのうち一人が手を挙げて霧彦を招き入れた。

「ひさしぶりだな、翔太郎、竜」

霧彦も手を挙げて彼らに応える。

左翔太郎は、ベストにネクタイ、ソフト帽といういでたちで、並の男なら到底着こなせないようなコーディネートだが、翔太郎のたたずまいは、それを見事なまでに昇華していた。

人懐っこい笑顔と、それに裏打ちされた陽気な性格が翔太郎の持ち味だった。

もう一人の男・照井竜は、翔太郎とは逆にクールを地で行く男だ。必要なこと以外は話さないし、人づきあいもいいとは言えない。だが、心根は優しく、そして熱い男だということを霧彦も翔太郎も知っていた。

二人とも、霧彦の親友だ。

「実はな、おまえに相談があるんだ」
翔太郎が切りだした。

「亜樹子のことなんだけど…」

亜樹子、と聞いて霧彦は眉をひそめた。

鳴海亜樹子：翔太郎と仲の良い女だが、霧彦はあまり彼女が好きではなかった。

それは、亜樹子の性格が大雑把でガサツだったからだ。

「その鳴海さんがどうかしたのか」

「須藤、左はその鳴海が好きなんだそうだ」
竜がマティーニを傾けながら言った。

「なに？きみたちは仲が良かったが、別に付き合っていない、と言っただけじゃあないか」

「それがな…、おれは気づいたんだ。亜樹子とはずっと近すぎてわからなかっただけなんだよ。おれが本当に好きなのは亜樹子なんだ」

霧彦はその場の空気を変えようと、バーテンに飲み物をオーダーした。

「鳴海さんのことが好きなのか…。で、それでぼくに何の相談なん

だい」

飲み物が来るのを待ちながら霧彦は翔太郎に言った。

「そうなんだよ。この気持ちを亜樹子にぶつけるか否かを相談したいんだ」

「そんなくだらない話ならばくは帰るよ」

立ち上がりかけた霧彦を竜がつかむ。

「待てよ須藤。左は真剣だ。真剣に鳴海のことを好きになんだ。話くらい聞いてやったらどうだ」

「待つのは君だよ竜。翔太郎がぼくたちに相談する時は、もうすでに答えが出てるんだ。」

違うかい？ 翔太郎、君はもう鳴海さんに告白する気になっているんじゃないのかい。

君が聞きたいのは、ぼくの後押しじゃあないのかい」

「う…」

翔太郎は絶句した。ほぼ霧彦の言うとおりなのだ。もう亜樹子に秘めた想いを伝えるつもりになっていた。

「おまえの言うとおりだぜ霧彦…。おれは亜樹子に好きだって言うつもりだ…。だが、本当にその決断でいいのか、確かめたいんだ！」

翔太郎はまっすぐな男だ。

自分にも、こんな一面があれば、もしかしたら冴子もアドレスを教えてくれたかもしれない。

「…わかったよ、翔太郎。君がそう決めたんなら、それが答えだ。うまくいくかどうかはわからないが、やってみたらいい」

霧彦の言葉に翔太郎は我が意を得たり、という表情になった。

「そうか、よし、やってみるさ。亜樹子におれの想いをぶつけるぜ！」

そんな翔太郎を見て霧彦は自分と冴子を翔太郎と亜樹子に重ねていた。

「ぼくも…そんなふうになっすぐに生きられたら…」

霧彦は前に置かれたカクテルを持ち、竜や翔太郎と乾杯をした。

つづく

第8話

園咲家の夕飯は、基本的に家族が揃って食べることになっていた。だが、必ずしも全員揃わなければならないというルールはなく、ある程度のルーズを許容する度量が父親の琉兵衛にはあった。

だがそんな夕飯の席で若菜は一人ため息をついていた。

「どうしたのさ、姉さん」

傍らに座った若菜の弟…来人…雪絵にフィリップと呼ばれる彼…が心配そうに見た。

「ふふっ…こりゃ重症だわね」

若菜の正面に陣取った冴子がいたずらっぽく笑った。

「何かあったのかい？」

「実はね、若菜は恋してるのよ」

「ちょ…お姉様！」

顔を真っ赤にして若菜が立ち上がった。

「へえ、姉さんが恋とは興味深いね。相手はどんな男なんだい？」

「素敵な方よ。ね、若菜」

若菜は俯いて何も言えない。

「そうだ：あのね、霧彦さん、今彼女いないんだって」

「なんで知ってるの？」

若菜が色めき立った。

「だって会ったもの。それがね、私の取引先の担当だったのよ、霧彦さん」

冴子の物言いに若菜は哑然とした。

「ふ、ふん。そうなんだ、よかったわねお姉様」

「あら？ いいの？」

「だ：だってあたし別に須藤さんのことなんて…」

冴子が口の中で笑った。

「素直になりなさいよ。霧彦さん、連絡待ってるわよ」

そのやりとりを聞いていた琉兵衛が突然拍手をした。

「ほう、霧彦君か？ 彼なら父さんも大歓迎だよ」

「や、やめてよお父様まで…。ごちそうさま」

若菜は食事を切り上げるとそそくさと食堂を出た。

「須藤…霧彦…？」

フィリップは聞き覚えのある名前に少し眉をひそめていた。

「はあ…」

自分の部屋で若菜はまたため息をついた。

同時に冴子への嫉妬がわき上がってきた。

「若菜、入るわよ」

ノックと共に冴子が入ってきた。

「お姉様…」

「好きなのね、霧彦さんのこと…」

若菜は黙って頷いた。

「ごめんね、勝手に霧彦さんに会って」

「…」

「霧彦さんは本当にいい人よ。私が保証する」

冴子が胸を張った。

「でもお姉様、須藤さんはあたしのこと…覚えてなかったのよ。ケガしたあたしを助けてくれたこと…」

「それは失礼な話だけど、きっと霧彦さんは人助けを日常的にやっているのよ。だからいちいち覚えてないんだわ」

「そうかしら……。あたし、なんだか自信なくなってきた」

「大丈夫よ。私、応援するから。霧彦さんともっと仲良くなれるように」

若菜はまた黙って頷いた。

まだほとんど知らない男のことが、なぜこれほどまでに気になるのだろうか？

一目ぼれというものの存在は、都市伝説だとはかり思っていた若菜だが、さすがに信じないわけにはいかない。

だがそれだけに、冴子の行動力が羨ましくもあった。

自分も、冴子のように快活に動くことができれば、あるいは初めて会ったあの日にもっと深く霧彦のことを知ることができたかもしれない。

冴子は、若菜の机のメモを見た。あの日霧彦が残した連絡先だ。

「がんばるのよ、若菜。ちゃんと霧彦さんに連絡しなさい」

若菜を見守る冴子の顔は、頼もしい姉の顔だった。

つづく

第9話

若菜が霧彦に連絡したのはそれから二日経ってからだった。

家への招待ではなく、外で会食をしようということだが、これは冴子の提案だった。

いきなり自宅よりは、霧彦も警戒はしないだろうということだったが、果たして霧彦は快諾してくれた。

『で、どちらの店ですか？』

「はい、マル・ダムールなんですが…、ちょっとわかりにくい場所なんで、あたしがお迎えに参ります」

これも冴子の作戦だった。

少しでも霧彦と二人きりの時間を作ろうという魂胆だ。

だが…

『ああ、マルダムールならわかりますよ。何時に行けばいいですか？』

霧彦の言葉に若菜はがっかりした。

だが気を取り直して、時間を告げ、若菜は電話を切った。

「どうだった？」

後ろから冴子の声がした。

「お姉様、また聞いてらしたの？」

「ごめんね。でも気になって…」

冴子はすまなさそうに手を合わせる。

「…霧彦さん、マルダムール知ってるって」

「誰かに行ったことあるのかしら？」

冴子の言葉に若菜の表情が曇った。

「誰か…って？」

「あ、ああ、ほら、友達とか、家族とか」

慌てて冴子を取り繕う。

「家族…ね」

だが若菜は別の感情が渦巻いていた。

霧彦の恋人である。

冴子の話では彼女はいないようだが、いくらなんでも自分の年齢と彼女いない歴がイコールではないだろう。

また、冴子に話したことが真実とも限らない。

「な、何よ若菜、そんなことぐらいで暗くならないですよ。イマジネ

ーションが豊かなのね」

「べ、別にあたしは…」

そこへ来人がやってきた。

「あのさ、ずっと気になってることがあるんだけど」

「なに？ 来人」

「若菜姉さんの好きな人って、須藤霧彦だよね」

さん付けしない来人に少し苛立ちながら若菜は頷いた。

「実はさ、ぼくの付き合ってる彼女のお兄さんの名前も須藤霧彦さんなんだ。もしかして、同一人物だったりして」

「まさか」

言いながら若菜は、もしそうなら姉弟の中で自分だけが霧彦との接点がほとんどないことに気付いて悲しくなった。

「でも、もしそうなら本当に世の中は狭いわね」

冴子が屈託なく笑った。

「そうだね…。ぼくの見たお兄さんは、まさに爽やかな好青年だったよ」

「ほら、間違いないんじゃない？霧彦さんよ」

冴子は若菜の手をとった。

「若菜、これは間違いなく運命よ。こんな偶然、滅多にあるもんじやなくってよ」

「そうだよ姉さん。あの人は、本当にいい人だよ」

二人が体を若菜に寄せてきた。

「あ、あたしは…だから…」

くよくよしていたって始まらない。

冴子の言う通り運命かもしれない。

若菜は冴子と来人に笑顔を見せると、その場を立ち去った。

「そうよ…あたしもお姉様のように前向きに考えなきゃ」

そうしなければならぬ理由があるわけではない。

また、霧彦がそんな女性が好みとも限らない。

だが若菜は確率を考えたのだ。

女性が前向きかそうでないかでは、前向きな女性が好きな男性が多いはずだ。

若菜は前向きに考え、行動しようと決めた。
つづく

第10話

カフェ マル・ダムール。

若菜たちは約束の時間より早くその店に来た。が、ほぼ同じ時刻に霧彦もやってきた。

「霧彦さん！」

冴子が霧彦を呼ぶ。霧彦の顔がほころぶのが見えた。その隣には、おめかしをした若菜が立っている。

「冴子さん、妹さんも…」

『冴子さん！？』

若菜は落胆と嫉妬の表情を冴子に向けた。何よりも若菜が悲しかったのは、自分のことを妹さん、と表現されたことだ。

「霧彦さん、妹の若菜よ」

不機嫌になった若菜を見て、冴子がすかさず取りなす。

「知ってますよ。前に会いましたからね。こんにちは、若菜ちゃん」
「こ、こんにちは…須藤さん」

若菜はおずおずと笑顔で応えた。

それを見て冴子がすぐに歩き出した。「ちょっと、店の人と話があるから、後で呼ぶわね」

冴子が若菜に目配せをする。

若菜はゆっくりと霧彦に近づいた。

「若菜ちゃんは、ここよく来るの？」

「…うふふ」

若菜の顔がすっかり上機嫌になった。

「どうしたの？」

「あたしのこと、若菜ちゃん、て…」

「あ、ごめん。調子よかったかな。まだ会って間もないのにね」

「ううん…。いいんです。あたし、嬉しくて」

「嬉しい？」

「ええ、須藤さんに…若菜ちゃん、て呼んでもらえるのが…ってあたし何言ってるんだろ。ご、ごめんなさい、あたし…」

若菜は霧彦の顔を見つめた。相変わらずの端正な顔立ちに若菜は見とれてしまう。

「そ、そんなに見ないでくれないかな」

「あ、ごめんなさい」

言いながら若菜は顔が真っ赤になっていくのがわかった。心臓の音もどんどん大きくなっていく。

「ところでさっきの話だけど、若菜ちゃんは、ここによく来るの？」

「いえ、あたしはほとんど…。でも家の者がここ好きで…」

その…須藤さんは…？彼女さん、とかと来たりするんですか？」

「ははは」

不意に霧彦は笑い出した。

「ぼくに彼女なんかいないさ。ぼくのようなやつを好きになるような女性はいないからね」

「そ、そんな…。どうしてそんなこと言うんですか？霧彦さんのようなひと、女の子が放っておきませんよ」

「ははは…、そうだといいね」

「そうですよ。でないとあたし…」

そこまで話して霧彦が真顔になった。

「なんだか、そんなに知らないのに、若菜ちゃんといると、自然と笑えてくるね」

「そ、そうですか？」

「うん。なんか親近感というかね。ぼくにも妹がいるんだ…だからかな？」

「いもうと…」

自分は妹レベルなのだろうか？

そう考えてまた若菜は悲しくなってきた。

「若菜ちゃん…ちょっと気になったんだけどさ…」

そう言って霧彦は、若菜の顔をじっと見つめた。

「な、なんですか」

「前にどこかで、会ったことないかな？ その…お父さんに連れられて家に行く前に」

「は、はい…実は…あたし」

そこへ来人がやってきた。

「やっぱりお兄さんだ！」

「あれ？ フィリップ君？ なぜここに」

来人は微笑むと霧彦の前に立った。

「ぼくは、そこにいる若菜姉さんの弟なんだ。姉さんたち、霧彦兄さんの話ばかりしてるんだよ」

「ち、ちよつと来人：何言い出すのよ！」

顔を真っ赤にしながら若菜が来人を制した。

「仲良いんだね」

「ご、ごめんなさい…」

謝りながら若菜は、来人になんてタイミングで現れるんだと心の中で悪態をついた。

やがて冴子が店から戻り、琉兵衛も合流、若菜は霧彦を伴って店へと入った。

つづく

第11話

店に入った霧彦たちは、冴子に促されるままに席についた。

正面に若菜、隣に冴子が座る。

冴子が隣ということで霧彦の胸は躍った。

「霧彦さん、今夜はコース料理だから楽しんでね」

そんな言葉ひとつとっても霧彦がドキツとする色気があった。

「あの、冴子さん…、ぼくの話の家でされてるそうで…」

「まあ、誰から聞いたの？ 来人から？」

来人…フィリップが舌を出して笑う。

「霧彦君、ようやく礼ができて嬉しいよ。今夜はゆっくり寛いでくれたまえ」

琉兵衛が相変わらずのにこやかな笑みをたたえてやってきた。

「はい、ありがとうございます。…実は…園咲さん…」

霧彦は来人を見た。

来人はその表情から意図を察したらしい。

「そうだ…父さん、ぼくの彼女の話は前にしただろう？ 実は、そこ

にいる須藤霧彦さんの妹なんだ」

「ほう…わぁっはは…」

琉兵衛は手を叩いた。

「これはまさに事実は小説よりも奇なり、だな。こんな偶然があるとは…」

「そういうわけなんで、妹をこれからもお願いします」

「妹さんだけかね？君はどうなんだ？私としては、君とも深い付き合いになると思うのだが」

チラリと琉兵衛は若菜を見た。

「は、はい…」

霧彦は恐縮しながら頭を下げた。

「そこまで恐縮しなくても…私の父親は悪い人じゃないわ」

冴子がにこやかに霧彦に言った。

「はい、霧彦さん」

料理を取りわけた皿を若菜が霧彦に渡した。

「ああ、ありがとう。若菜ちゃん」

いつの間にか若菜の呼び方も霧彦さんになっていた。

「そうだ：霧彦さん、ご家族は何人なんですか？」

来人がしまったという顔をしたが、霧彦は笑いながら答えた。

「二人です。ぼくと妹の二人だけ」

「えっ…」

若菜の顔色が変わった。

「ぼくの両親は、ぼくたちが小さい頃に亡くなったから」

「ご、ごめんなさい：あたし、知らなくて…」

泣きそうな顔になっている若菜に霧彦は明るく言った。

「こっちこそごめん、若菜ちゃん。若菜ちゃんが気にすることないからね」

「さ、料理食べましょ」

冴子がその場をうまく収め、霧彦は冴子に従って食事を口に運んだ。

「冴子さんは、お休みの日は何をされてるんですか？」

霧彦が飲み物を飲みながら冴子に聞いた。

「私？ そうね、映画を見たり、美術館行ったり、かな」

「美術館ですか？ ぼくも好きなんだよ」

霧彦は学生時代に絵をよく描いていた。

一時期、本気で美大の受験も考えたぐらいだ。

その話を冴子にすると、冴子も食いついてきた。

「私もね、考えたことあるのよ。やっぱり一度は通るのねえ」

霧彦はすっかり嬉しくなった。

冴子と共通の話題で盛り上げられるとは思わなかったからだ。

その一方で若菜はだんだん不機嫌になっていく。

それに気付いた冴子が若菜に話を振った。

「そうだ…若菜も絵好きなのよね？」

「え、ええ、まあ…」

確かに若菜も絵は好きだった。

が、冴子ほどの才能もなくましてや美大など考えたこともなかった。

結局、若菜は何も話せなかった。

そんな若菜が気にならなかったわけではないが、霧彦は隣の冴子にすっかり舞い上がってしまった。

そんな霧彦をじっと若菜は見つめていた。

つ
づ
く

第12話

「姉さん、飲み過ぎだよ」

宴もたけなわ。

霧彦は来人の声に若菜を見た。

若菜の眼前にはワイングラスが所狭しと並べられていて、若菜は順番に飲んでいた。

「若菜ちゃん…お酒強いんだね」

「何言ってるんだよ霧彦兄さん、若菜姉さんは普段お酒なんか飲まないんだよ」

「うるさいわねえ…お酒ぐらいいいれしょ」

若菜がグラスを傾けた次の瞬間テーブルに倒れてしまった。

驚いた霧彦たちを尻目に、若菜から安らかな寝息が聞こえてきた。

「やれやれ…とんだ失態で申し訳ないね、霧彦君」

琉兵衛が深々と頭を下げた。

「若菜、母さんがいなくてよかったな」

スヤスヤと眠っている若菜を見て苦笑しながら琉兵衛が呟いた。

「母さん？」

訝る霧彦に来人が言った。

「母さんは、仕事の関係でいま海外にいるんだよ」

「そうなのか」

その直後冴子はすぐに立ち上がって霧彦に言った。

「ねえ霧彦さん、若菜を送ってくださいませんかしら？」

「ええっ？」

「来人はあまり力がないし、お父様に運ばせるわけにもいかないの。お願い」

冴子に懇願されれば、霧彦は承諾するしかない。

「じゃ、私たちはお金支払ってくるから、若菜をお願いね」

「何だよ冴子姉さん、まだ…」

何か言いたげな来人のを口を塞いで琉兵衛も冴子についていく。

果たして、店には霧彦と寝ている若菜が取り残された。

「ほら、若菜ちゃん」

体をゆすって若菜を起こす。

「う…ううん」

若菜がゆっくりと立ち上がった。

「帰りますよ。こんなに飲んで…」

「酔ってないもん」

言いながら若菜の体がふらついた。

「何言ってるんだよ」

若菜の体を支えながら霧彦が言う。

「さ、帰るよ」

「やだ！歩けないですう」

普段の貞淑な若菜とは違い、すっかり人が変わってしまったている。

「そんなこと言わないでさ」

「歩けないからおんぶしてください」

「おんぶって…。いい子だからそんなわがまま言わないの」

「いい子じゃないもん」

霧彦はため息をつく。若菜を背負った。

「えへへ…」

嬉しそうに若菜が笑う。

「うれしいな…霧彦さんにおんぶ…」

「そうかい？よいしょ」

霧彦は若菜を背負ったまま外へ出た。

「優しいね…霧彦さん…」

「何言ってんだよ。若菜ちゃんが飲み過ぎるからじゃないか。」

「だって霧彦さん、お姉様とばかりお話するんですもの…」

むくれたように若菜が言った。

「ははは…それは悪かったね」

「そうですね。全然あたしにかまってくれないなんて不公平です
う」

霧彦が困ったように言った。

「ごめんごめん」

「だから家までおんぶしてくださいね」

「はいはい」

言いながら霧彦は満更でもなかった。

若い女性に頼られて悪い気はしない。

「霧彦さん…」

それっきり若菜は霧彦の背中で眠ってしまった。

翌日、若菜はひどい頭痛と共に目覚めた。

どうやって帰ってきたのか、おぼろげながら思い出す。

『おんぶしてくれなきゃ帰れません』

『家までおんぶしててください』

数々の行動に若菜は顔が真っ赤になった。

「あ、あ、あたし…」

若菜は頬に両手を当てた。

「霧彦さん…」

「おはよう、目覚めた？」

冴子がドアの前に立っている。

「霧彦さんにお礼言いなさいよ。ずっとおんぶして送ってくれたんだから」

「き、霧彦さんは…？」

「帰ったわ。お父様は泊まっていけって言ったんだけどね」

「あ、あたし…」

若菜は鏡を見た。
ひどい顔だ。

「どうしたのよ？あなたがあそこまで飲むなんて」

冴子が呆れたように言った。

「あたし…霧彦さんがお姉様とばかり喋ってたから…」

「やきもち、なのね」

冴子の言葉に若菜は頷いた。

「あたし…恥ずかしい。霧彦さんの前であんな…」

冴子は若菜の手をとった。

「お姉様…霧彦さんのことどう思ってるの？」

「どうって？確かに素敵なひとだと思うけど…恋愛対象ってこと？」

「だって…昨日だってあんなに楽しそうに…」

「若菜」

冴子は若菜を握る手に力を込めた。

「私は、いつも若菜の味方よ」

「ほんと…？…あたし…霧彦さんが好き…大好きなの」

「わかっているわ」

「…でも、お姉様は霧彦さんのこと…」

冴子はカラカラと笑った。

「私は霧彦さんのこと何とも思っていないから安心して。取ったりしないわよ」

「うん」

二人の姉妹は手を握りあった。

つづく

第13話

霧彦は会社に出勤した。

冴子との再会や園咲家での会食など目まぐるしく変わる一週間だった。

そんな中、霧彦は上司である井坂深紅郎と昼食を摂っていた。

「なんだ？相談って」

「ディガルの担当なんですがね…ちょっと長い付き合いになりそう
でして」

「美人なのか？」

井坂が身を乗り出した。

「ええ、まあ…」

「よかったじゃないか。…で、長い付き合いってのは？」

「実は…その…」

霧彦は水を飲んだ。

「なんだよ。まさかおまえ恋したとか言うんじゃないだろうな」

霧彦は黙ったまま水を飲んだ。

「ちょ…おまえそれ本気か」

「いや違うんです。ぼくは、夜寝る前に彼女の顔が浮かんできて…」
「何が違うんだ。明らかに恋じゃないか」

井坂は半ば呆れながらメニューを弄った。

「ったく、しょうがないな、おまえは」

「はあ…」

ややあって井坂は苦笑まじりに言った。

「まあ、おまえのことだ。仕事に支障はきたさないと思うがな」

「そ、それはもちろん！」

「…次はいつだ？」

運ばれたパスタを口に入れながら井坂が訊いた。

「は？」

「彼女との打ち合わせだよ」

「井坂さん…まさか」

井坂はニヤリと笑った。

「決まってるだろ。俺も参加だ」

霧彦は嫌な予感がした。

井坂は人間としても上司としても尊敬できる好漢だが、それがために女性からの人気も高かったのだ。

そんな彼が冴子と会えば、冴子も井坂に惹かれたりしないだろうか。霧彦はそんな想像をしてしまっていた。

食堂を出ると、霧彦の携帯電話が鳴った。

「はい」

『あ、あの：霧彦さん：あたし：若菜です』

その様子を見ていた井坂は「先に戻るぞ」と告げて会社へ帰って行った。

井坂に目礼し、霧彦は電話に向かった。

「どうしたんだい？」

『あの：あたし、謝りたくて…。この間はごめんなさい…』

霧彦はあの日の若菜を思い出した。
酔って霧彦におんぶをせがんだ若菜の姿が妙に可愛らしかった。

「気にすることないよ」

『ほんと：ですか？あたし：』

「大丈夫だよ。あの日はぼくも嬉しかったんだ」
『えっ…？』

「ぼくのことを頼りにしてくれている、てわかったからね」
『…本当ですか？：あたしのこと：嫌いになってないの？』

若菜の声が泣きそうになっている。

「当たり前じゃないか。そんなことで嫌いになんかならないよ」
『酒癖の悪い女の子だって思ってたない?』

「思ってたない」

『ほんと?…じゃあ、これからも、頼りにしていいの?』

「いいとも」

『…ありがとう…うれしい』

霧彦は若菜の嬉しそうな声に頷いた。

その仕草を電話の向こうの若菜は気づいていなかったが、若菜は続けた。

「あの…霧彦さん…」

『ん?』

「また…会えますよね…」

『うん、会えるよ』

「…会いたい」

『え?何?』

「い、いえ、なんでもないです!しつれいします」

逃げるように若菜は電話を切った。

「誰からだ?」

会社に戻った霧彦に井坂が訊いた。「例の彼女か」

「…の妹です」

「妹にまで手え出してんのか」

「ち、ちがいますよ」

「とかなんとか言いつつ、顔がゆるんでるぞ」

井坂に指摘され、霧彦は自分の顔がにやけていることに気づいた。

「姉妹に二股とは良い変態趣味だな」

「だからちがいますって」

13時になると井坂はすぐに仕事モードに入った。

「須藤、ディガルの資料あとでメールしとけ」

メリハリの利いた仕事ぶりは井坂の持ち味だ。

そんな井坂の姿は霧彦の目標でもあった。

つづく

第14話

次の日、仕事を終え帰宅した霧彦を雪絵が出迎えた。

「あれ、珍しいな。今日はフィリップ君に会わないのか」

「うん…そのことなんだけど…」

雪絵は食事を運びながら言った。

「お兄ちゃんて、フィリップくんの家族と会ったって言ってたよね？」

「ああ」

「今度、私も向こうの家族に会うことになったの…。それで、お兄ちゃんにも…」

霧彦は茶碗に盛られたご飯を口に入れながら答えた。

「ああ、いいよ。しかし、なぜだい？」

「ン…向こうのお母様が連れてきなさいって…」

「お母様？」

霧彦は冴子のお話を思い出した。

確か、海外出張をしていたとか…。

「ね、お兄ちゃん、お母様ってどんな人？」

「いや、実はぼくも会ったことないんだ。前の会食ではいなかったからね」

「そういえば、その会食でフィリップくんのお姉さんをおんぶして送ってあげたんでしょ」

「ちょ…なんでそれを」

霧彦は慌てて茶碗を置いた。

「フィリップくん言ってたよ。そのお姉さんってお兄ちゃんのこと好きなんじゃないの？」

「何言ってるんだよ。若菜ちゃんは違うって」

「仲良さそうじゃん。若菜ちゃん、なんて呼んじゃって」

霧彦は、しかし顔を想像したのは若菜ではなく冴子だった。

「ちょっとお兄ちゃん、想像してんじゃないわよ！」

「あ、ああ…すまない」

霧彦は箸をとった。

「ねえお兄ちゃん…。私なら、もう大丈夫だからね…」

「雪絵…？」

「だから、お兄ちゃんも…誰かを好きになってもいいんだよ…」

「だから若菜ちゃんは違うって」

「誰も若菜さんの話なんかしてないわよ。

そんなこと言ってお兄ちゃんが気があるんじゃないの？」

「違うって。若菜ちゃんじゃなくて…あ、いや」

雪絵がすかさず体を寄せてきた。

「若菜ちゃんじゃなくて…ってことは、誰か他にいるんだ？好きな人」

「早く食べろよ」

だが雪絵は嬉しそうに笑っている。

「お兄ちゃんが、女の人の話するの、ひさしぶりだね」

「それがなんだよ？」

「ほとんどそんな話しないから、ホモなんじゃないかって思ったわよ」

「やめてくれよ。ごちそうさま」

食器を片付ける霧彦に雪絵が言った。

「さっきの話だけどさ…」

「ああ、いっしょに行くよ」

「違うって。若菜さんの話よ」

雪絵が少し苛立ちながら言った。

「私思っただけだね、やっぱりお兄ちゃんのこと好きなんじゃないかなあ？」

「なんでだよ？」

「だって、いくら酔ってても嫌いな人におんぶなんかされたくないわよ普通」

「バカだな。あの時はフィリップ君とお父さんに無理させないようについていう理由があっただな」

「はあ…」

雪絵がため息をついた。

「まあいいわ。向こうも家族が来るみたいなこと言ってたから、若菜さんに会えるの楽しみにしようっと」

「そうしろ」

霧彦は雪絵の食べた皿も洗いながら冴子の顔を思い浮かべた。

「なあ、さっきの話だけど」

「何？家族が来るとかいうやつ？」

「園咲の家は、全員来るのか？」

「知らない。でもそうじゃない？」

「そうか、よし！」

冴子にまた会えると思うと、霧彦の胸は躍った。

「フィリップ君に言っておけ、絶対行くって」

つづく

第15話

木曜日。

仕事を終えた若菜は電車に乗っていた。

あの日から若菜は極力電車で通うことにしていた。

もしかしたら霧彦に会えるかもしれないという淡い期待もあったの
ことだが、その期待が成就されたことはなかった。

それでも若菜は霧彦が同じ駅を利用している確信があった。

少なくとも家は近所なのだから、それと気付かずに何度か同じ電車
に乗っているかもしれない。

「はあ…」

電車の窓から流れる景色を眺めていた若菜は、その窓に霧彦の姿を
見つけた。

だが乗車率の高い電車では霧彦のいる場所までたどり着けない。

なんとか外を見るふりをして霧彦の姿を確認し、電車が停車するた
びに少しずつ霧彦に近付いた。

「…！」

若菜はふと思った。

自分のことを霧彦はどう思ってるんだろう？

電話ではああ言っていたが、もし迷惑な人間だと思われていたら…
そう考えると若菜の足が止まった。

その途端電車が急停車した。

「きゃっ！」

若菜の体が前のめりになる。
その体を霧彦が受け止めた。

「大丈夫？ 若菜ちゃん」

「き、霧彦さん…」

若菜は顔が真っ赤になった。

「ご、ごめんなさい…」

慌てて体を離し、若菜は吊り革を握った。

「若菜ちゃんも同じ沿線で働いてるんだね。何の仕事？」

「あ、あたしは、その…アパレル関係…」

「そう」

霧彦は笑顔を見せた。
若菜の頭がぐらくらする。

「もしかして、この前のことまだ気にしてる？」

「え…あ、その…」

若菜は思わず霧彦から目をそらした。

「あたし…」

「ぼくは俗物だからね。気にしなくてもいいよ」

そう言って霧彦はまた笑った。

「霧彦さんは、俗物なんかじゃありません…」

「ハハ…若菜ちゃんは優しいね」

「そんな…そんなこと…」

若菜はまた目を伏せた。

「あのさ、フィリップ君とうちの妹のことなんだけど」

「フィリップ君？」

若菜が訝しげに顔をあげた。

「来人君のことさ。妹はそう呼んでるんだけど。今度、家族に紹介する機会があるみたいだね」

その話は来人から聞いた。

母親の文音が海外から戻ってくるから、それに合わせてまた会食を
したいと来人が提案したのだ。

「若菜ちゃんも来るのかい？」

「あたしも行きます。こ、今度は飲み過ぎないようにするわ」

「いいよ」

「えっ？」

霧彦は若菜を見た。

「また飲み過ぎたら介抱するから」

「き、霧彦さん…」

若菜は慌てて霧彦から目を背けた。

「だ、だめですよ。その日は妹さんも来るんでしょう？あたしを送
つたら…」

「あ、そうか。そうだな、ハハ」

「そうですよ、霧彦さんたら」

霧彦につられて若菜も笑顔を見せた。

「やっと笑ってくれたね」

「えっ…」

「ずっと思いつめたような顔してたからさ…。ぼくといると面白くないのかなって」

「ち、ちがいます。あたしはただ…うれしくて…」

若菜は頬を赤らめて言った。

「うれしくて…？」

「だって…、あたし、霧彦さんに…その…会いたくて…」

「え？」

「あ、いえ、その…、あたし…、あんなことしたのに…」

「またそれだ。若菜ちゃんは真面目だね」

「そんな…」

霧彦は吊革につかまったまま訊いた。

「ところで、冴子さんは来るのかい？」

「お姉様…？え、ええ…」

「そうか…。よし、そうかそうか」

霧彦は嬉しそうに笑った。

「…霧彦さん…、お姉様が来るの…うれしい？」

自分が行くと言ったときと全く違う反応に若菜は嫌な予感がした。

「あ、ああ…いや、まあ…そう、かな…」

霧彦は少し赤くなりながら答えた。

「そう…なの…」

さっきまでの楽しい時間を若菜はすぐに忘れ、霧彦の反応に暗澹な気持になった。

二人は同じ駅で降りた。だが若菜はすぐに霧彦と別れ走り去った。あのまま霧彦と一緒にいれば泣いてしまいそうだった。

「…霧彦さん…、お姉様のこと…」

同じ駅で降りたのに、霧彦は別に若菜のことを思い出そうともしない。

あの日、初めて霧彦に会った駅なのに。

自分はあの日からずっと霧彦に焦がれてきたというのに。

「どうして…霧彦さん…どうしてなの…」

夜風が若菜を包む。

だがそれよりも暗く冷たい風が若菜の心に吹いていた。

つづく

第16話

翌日の朝。

若菜は駅に向かった。昨日の霧彦の反応については誰にも話していない。

まして、冴子には相談できなかった。

「うまくいかないな…」

暗い気持ちのまま、若菜はホームに降りた。

「若菜ちゃん」

ホームの後ろで若菜は声をかけられた。振り返るとそこにいたのは霧彦だった。

「き、霧彦さん…」

若菜は反射的に目をそらした。

「…ご、ごめん」

思いがけない若菜の反応に霧彦は後退した。

「あっ…」

「ぼく、つい調子に乗って…ごめんな」

霧彦は苦笑いしながら若菜から離れた。

「あ…、ち、ちがうんです。待ってください」

若菜は思わず霧彦の服を掴んでいた。

「え…？」

「ご、ごめんなさい…。あたし、ちょっとおかしいんです」

「…なんか、あったの？」

霧彦は若菜を見た。

なんて瞳で見つめるんだろう…。

若菜はまたドキドキした。

この想いを打ち明けられたら、どんなに楽だろう…。

だが、その気持ちを告げたら今までのような関係にはなれない。

「…気持ちを抑えるのって…大変ですよね」

「ん？あ、ああ…そうだね」

「…あたし…あたしこそ、調子に乗っちゃって…ごめんなさい」

「ふふっ…」

霧彦が笑った。

今度は苦笑ではない。

「なんだかぼくたちって謝ってばかりだよね」

「…ええ」

「互いに気を遣いすぎてるんだろうか？」

「そうかもしれませんね」

電車が揺れる。

よろめく若菜を霧彦が支えた。

「あ、ごめん」

霧彦はすぐに体を離れた。

「…たぶん、気を遣うんじゃないくて、嫌われたくないからじゃないかな」

「え…」

「ぼくは若菜ちゃんに嫌われたくないんだ」

「そんな…あたしが霧彦さんを嫌いになるわけ…」

「どうかな？ぼくが前の若菜ちゃんみたいに酔っ払いになったらどうする？」

「あたしが介抱する」

真顔で答える若菜に霧彦は吹き出した。

「あははは」

「あ、あたしは本気ですよ…」

「えっ？」

「あ、あたしは本気で霧彦さんを…」

言いかけて若菜は慌てて口をつぐんだ。

「霧彦さん、お姉様のことなんだけど…」

「冴子さん？」

「お姉様のこと…好き…なんですか？」

「いきなりどうしたの」

だが若菜はそれには答えない。

「お姉様は、素晴らしい女性ですものね…」

「好きだよ…というか…憧れ、かな」

「憧れ…？」

霧彦は電車の窓に目を移した。

「ぼくの友達に、とてもまっすぐな男がいる。何の銜いもなくただ目の前の目標に向かって走る…そんな男がね。

冴子さんからは、同じ雰囲気を感じられる。

まっすぐで、裏表のない人というのは、ぼくの憧れなんだ」

「そう…ですよね…」

若菜はますます悲しくなってきた。

こんな有様では、霧彦に相手にしてもらえないのも当然だ。

「若菜ちゃんには若菜ちゃんの良さがあるよ」

「え…」

「若菜ちゃんは、純粹で真面目なところ」

霧彦は若菜に向き直って言った。

「そ、そんな…あたしなんか…」

「そうやって自分を卑下するのは悪い癖だよ。…でも、ぼくも他人のことも言えないけどね」

「だって…ほんとのことなんですもの…。あたしなんか…」

「そういう考えが、本当にそういう人間にするんだよ」

若菜は黙って頷いた。

「じゃ、ぼくはここで降りるから」

「あの、霧彦さん…」

「ん？」

「また…駅で会っても話しかけて…くれます？」

「当たり前だよ。若菜ちゃんこそ、いいの？」

「あ、あたしは、はい！」

霧彦は爽やかな笑みを若菜に向けて電車から降りた。

つづく

第17話

翌日の金曜日、冴子が霧彦の会社にやってきた。

霧彦側は井坂も同席している。

「紹介します、ぼくの上司・井坂です」

「よろしく」

「こちらこそ」

冴子の挨拶に気さくに応じた井坂はそのまま冴子の正面に座った。
相変わらず美しい。

霧彦は冴子の美貌に目を奪われた。

そんな霧彦を尻目に井坂は次々と冴子に質問し、冴子はそれに的確に答えていく。

霧彦は冴子が楽しそうに話しているようにさえ思えてきた。

「さて、園咲さん…」

打ち合わせが一段落し、井坂が口を開いた。

「…どうです？これからお昼でも」

「ええ、喜んで」

にこやかに応じる冴子に霧彦は少し嫌な気持ちになった。

冴子は社交的な性格だからこういう笑顔も当たり前のようにできるのだ、と自分を納得させて霧彦は店まで同行した。

果たして店では、井坂が仕事を離れた位置からの会話を冴子に仕掛けた。

「私は、学生の頃医師を目指していましたね…」

「まあ、お医者様ですか？」

「しかし、悲しいかな頭が足りなくて断念したんです」

「挫折は誰にでもありますわ。ところで井坂さんはお休みの日は何をされてますの？」

この質問に霧彦はまたも嫌な気持ちになった。

前に同じ質問を冴子にしたが、冴子からはそういう質問がなかったからだ。

だが目の前の冴子は井坂にそういう質問をしている。

「私には趣味らしい趣味がなくてね。凝り性だが飽きっぽいんですよ」

「まあ。それでは、たとえば芸術とかはいかがです？」

「芸術？」

「ええ、私は絵画や彫刻などを見るのが好きなんです…」

「写真はどうです？」

井坂からの問いに冴子はぱっと表情を変えた。

「写真も大好きですよ」

「実は私の知り合いの弟子が今度写真展を開くんですよ。よかったらご一緒しませんか？」

この早業に霧彦は舌を巻いた。

まだ知り合って一日と経っていないのに。

「それは、何という方です？ 実は父の知り合いにも写真家がおりまして」

そんな話は初耳だ。

「門矢士です。彼の師匠は光栄次郎といって、私の学生時代からの知り合いです」

「まあ、光栄次郎さんでしたら、私の父親の知り合いですわ。すごい偶然ですね」

「決まりだ。では、門矢君の写真展…」

「ええ、お受けしますわ」

にこやかに冴子が答えた。

「須藤、君もどうだ」

井坂が誘う。

だが霧彦は首を横に振った。

写真は門外漢だ。

それはともかく、自分だけがこの会話に入っていないことを霧彦は実感した。

井坂と冴子のデートに同行しても惨めな気分になるだけだろう。

その場は当たり障りのない会話で切り抜け、霧彦と井坂は会社に戻った。

「どういうつもりだよ？ せっかく俺がきっかけ作ってやろうって思っただのに」

オフィスで井坂が切り出した。

「そんなこと言って、井坂さん結構ノリノリじゃないですか。…とにかく、ぼくは写真はわかりませんから」

言いながら霧彦は席についた。

なんだか無性に寂しくなった。

そもそも冴子は自分のことをどう思っているのだろうか？

少なくとも、井坂のように会話は弾まなかった。

「…くそっ」

霧彦は小さく呟いた。

なまじ井坂が仕事やプライベートでもよき理解者であるため、霧彦にはやりきれないものがあつた。

つづく

第18話

その日の仕事を終えた霧彦の携帯に、またも翔太郎から連絡が入った。

一杯だけ付き合ってくれ、という。

霧彦は雪絵に連絡を入れ、いつものバーに向かった。

「よう、霧彦」

翔太郎は既に飲んでいた。

「今日は竜はいないのか」

「照井は忙しいからな…。実はさ、亜樹子のことなんだが」

翔太郎が真剣な表情になった。

「どうしたんだ」

「あいつに会った。亜樹子にな」

「…それは早いな…」

霧彦は少し驚いた。あの話をしてからそんなに日が経過していないのに、この男はもう実行に移したのか。

だが翔太郎の話の続きはさらに意外なものだった。

「亜樹子が相談があるって呼ばれてさ…、あいつ、好きなやついるんだってさ」

「そうか」

「そうか…っておまえ、もっと他にいないのか？相手は誰だ、とか」

霧彦はカクテルを飲みながら答えた。

「聞いてほしいのか？…ていうか知ってるのか？」

「…照井」

翔太郎があらぬ方向を見て言った。

「なに？」

「亜樹子は、照井のことが好きなんだとよ」
そう言って翔太郎は一気に酒をあおった。

「まいったぜ。まさか照井とはよ…。こいつは盲点だった」

「竜は、このことを…？」

「知らない。…ふふっ…こいつは傑作だぜ。あいつから連絡あったとき、ちよっと期待したんだよな。もしかしたら、亜樹子も…って。受け答えのシミュレーションとかもしたんだけどな…」

翔太郎はマスターに酒のおかわりを頼んだ。

「翔太郎…おまえ、鳴海さんのこと本気だったんだな」

「当たり前だ。…霧彦、おれはどうすれば…」

霧彦は翔太郎の肩に手を置いた。

「翔太郎…実はぼくも好きな人ができたんだ…」

「なに？」

「もちろんぼくのことを好きなのかどうかはわからない。だけど、その人に他に好きな人がいたなら、ぼくは祝福するしかない」

「…」

「だってそうだろう。冴子さんの願いがその人と仕合わせになることなら、それを願うのが好きになった男のすることじゃあないか？」

「冴子さん、ていうのか」

翔太郎の顔から悩みが消えた。

「面白いな。もっと詳しく聞かせろよ」

「翔太郎、ぼくの話聞いていたかい？」

「ああ、おまえにも好きな女がいたとはな。てっきりホモだと思ってたぜ」

霧彦は苦笑しながら酒を飲んだ。

「…ぼくにできることは、彼女にとって何が望みなのか、てことなんだ。彼女の望みを叶えてやるのが好きになった男のすることさ」

「おまえはそれでいいのか？おれは、その仕合わせにする相手が自分じゃなければ意味がないと思ってる」

「翔太郎…」

「霧彦、おれは応援するぜ、せっかく好きになった冴子さんをそんな簡単に諦める手はないだろ」

確かに翔太郎の言う通りだ。

まだ冴子が井坂のことが好きだと決まったわけではない。

霧彦は小さく頷くと、グラスを傾けた。

「でさ、おれの話だけど…」

「鳴海さんは竜が好きなんだろう？ だったら、祝福するしかない」
「結局それか…」

つづく

第19話

日曜日。

霧彦は雪絵と共にホテルにいた。

園咲家との会食である。

しかも今日は前回いなかった園咲家の母親も来るという。

園咲家の人々とそれなりに面識のある霧彦と違い、雪絵はさすがに緊張しているのがわかった。

「こんにちは、霧彦さん」

冴子がいっものように愛想良くやってきた。

「あ、冴子さん…。妹の雪絵です」

「はじめまして。雪絵です。お願いします」

雪絵が頭を下げる。

冴子は笑顔で雪絵に返事をした。

「こちらこそよろしくね、雪絵さん」

冴子の態度に雪絵も笑顔を見せた。

「若菜もあっちにいるのよ」

「じゃ、雪絵挨拶に行こうか」

霧彦は雪絵を伴って若菜のいる場所へ向かった。

「き、霧彦さん…」

霧彦の姿を認めた若菜は少し頬を赤らめながら挨拶をした。

「須藤雪絵です」

「どうも…園咲若菜です」

冴子と違い、若菜はおずおずと答えた。

「あなたが須藤雪絵さん？」

不意に後ろから声がした。

年齢は重ねていたが、二人の姉妹に劣らぬ美しさと品の良さを兼ね備えた女性が立っていた。

若菜たちの母親・園咲文音だ。

「はじめまして、園咲文音です」

「こ、こんにちは…須藤雪絵です」

緊張しながら雪絵は挨拶した。

「そんなに固くならなくてもよくってよ。…それから…あなたが、須藤霧彦さんね？」

文音の目が霧彦を見た。

「はじめまして」

「いろいろと話は聞いているわ。今日は楽しい食事になりそうのこと」

笑顔を見せた文音はそのまま雪絵との談笑に入った。

なんとか母親に気に入られようと雪絵も笑顔で応じる。

「…きれいなお母様だね」

側にいた若菜に霧彦は言った。

今日も若菜は可愛らしくおめかしをしている。

「…若菜ちゃんもかわいいね」

「や、やだ…」

若菜は真っ赤になった。

「ご、ごめん。また調子に乗っちゃったな」

「でも、うれしい…」

若菜ははにかみながら笑顔を見せた。

長い髪を二つ団子状にしてまとめたヘアスタイルに服装は清楚なロングスカート。

短めのスカートを着ていた冴子とは対照的なスタイルだ。

「あまり見ないでください。恥ずかしいな…」

言いながら若菜も満更ではなさそうだ。

「あの…」

「ん？」

「き、霧彦さん…も…素敵…です」

「そうかな？いつもと同じだけど」

霧彦の服装は、仕事で着ているスーツだ。違いがあるとすれば、普段はクールビズで外しているネクタイをしているくらいである。

「ネクタイ…」

「ああ、よく見てるね。これは妹の雪絵が買ってくれたんだ」

「そう…ですか」

「立ち話もなんだし、中へ入りましょう」

文音の声が響く。

霧彦は若菜を伴ってホテルの中へ入った。

冴子が若菜に近付いて言う。

「若菜、まさかとは思うけど、雪絵さんにやきもち妬いてるんじゃないでしょうね」

「お、お姉様…。だって…あの二人はいつしよに生活してるし…」

冴子は呆れたようにため息をついた。

「妹なんだから、当たり前でしょ。それに霧彦さんは両親を亡くして雪絵さんと二人で生きてきたんだから」

「でも…」

「来人が好きになった人よ。祝福してあげなきゃ。霧彦さんのことでやきもち妬いてる場合じゃないわよ」

若菜は伏し目がちに頷いた。

「うん…」

「よし。じゃ、霧彦さんの前に座って。今日は酔っ払ったらだめよ」

いつものように的確に話す冴子を見ながら若菜は思った。

自分が本当に嫉妬しているのは雪絵ではなく冴子なのだ。

「はあ…」

「どうしたのさ、若菜姉さん。ぼくの彼女がいるというのに…」

「そうよ若菜、須藤さんたちに失礼ですわよ」

来人と文音が口を揃えて言った。

「ごめんなさい…」

すっかり小さくなってしまった若菜は、それでも妹と楽しそうに談笑する霧彦を見た。

自分と話している時には見たこともない表情だった。

『あたしといると…：どうなんだろう…：？』

やはり雪絵にもやきもちを妬いてしまう自分が若菜は嫌になった。

つづく

第20話

会食は順調だった。

雪絵もうまく順応しているようで、文音や来人たちと談笑している。

だがそんな中霧彦は浮かない表情を浮かべていた。

冴子と井坂のことを考えていたのだ。

「あの…霧彦さん」

気がつくと若菜が隣にいた。

「やあ」

「…何か、あったんですか？」

「ハハ…、何にもないよ」

「ほんとですか…？あたしでよかったら、話してくださいね」

「ありがとう…」

ややあって、霧彦は口を開いた。

「ぼくの友達の話なんだが、自分が好きな女に他に好きな人がいるらしいんだ」

「ええ…」

自分と同じだ、と若菜は思った。

「ぼくは、それに対して好きな女の幸せを願ってこそその男だ、と答えた。つまり、自分ではない誰かにその幸せを託すのだと」

「霧彦さんは…それでいいんですか？」

「若菜ちゃん？」

「…あたしは嫌…。あたしの好きな人に、他に好きな人がいたら、そんなふうに考えられない」

若菜は唇を結んだ。

「だけど、あたしじゃだめなんだたら…諦めるしかないけど…」

「若菜ちゃんは、いま好きな人とかいるの？」

若菜はドキッとした。

「ど、どうして？」

「いや…若菜ちゃんこそ何か思い詰めたような表情だったから…」
「…います」

若菜は霧彦を見つめた。

「若菜ちゃん…？」

「でも、全然気付いてもらえなくて…。そばにいるのに…」

若菜は必死に勇気をふり絞った。

「そうか、なかなか気付いてもらえないのか…」

霧彦は遠い目になった。

「…お姉様のこと…ですか？」

「ば…何言ってるんだよ若菜ちゃん…。ぼくの話はいいから」

「よくないです。あたしは、霧彦さんの役に立ちたいんです。少しでも霧彦さんの力になりたいんです。…助けてくれたお礼がしたいんです」

「助けてくれたお礼…？」

若菜は悲しげな瞳で霧彦を見つめた。

「若菜ちゃん…？」

「そこで何話しているの？写真撮りましょう」

文音がカメラを持って二人の間に現れた。

「みんなで撮るわよ」

園咲家と霧彦・雪絵姉妹が収まり、文音がホテルのスタッフに頼んでシャッターを押してもらった。

中途半端に話が終わったため若菜は複雑な表情のまま写真に写った。

会食が終わり、一同は外へ出た。

「兄さん、私フィリップくんとこの後…」

「ああ、行ってきたな」

雪絵はうれしそうにフィリップ…来人のもとへ走った。

「私たちも帰りましょうか」

文音が琉兵衛に告げる。

「あの…すみません」

霧彦が呼び止める。

「ん？」

「若菜…さんをお借りできませんか？…遅くならないうちに帰しますから」

「まあ」

冴子と文音の顔が変わった。

「ええ、よくってよ。若菜」

「はい…」

若菜は信じられないといった表情で進み出た。

「さあ、お父様、若菜は霧彦さんにお任せして、私たちはお茶でも飲みましょ」

去りながら冴子は若菜に目配せした。

若菜は顔を真っ赤にして霧彦の前に立った。
気がつく二人きりだ。

「あ、あの…あたし…」

「ごめんね、突然…」

霧彦はそのまま歩き出した。

慌てて若菜も後を追う。

「このあたりで、どこかお茶でも飲もうか」

「は、はい」

若菜は霧彦の真意を計りかねながら、しかし内心ではうれしかった。

「うふふ…」

二人は、近くの喫茶店に入った。

つづく

第21話

「あの…霧彦さん…お話って…」

二人きりの喫茶店で若菜は口を開いた。

「さっきの話だよ。若菜ちゃんは、ぼくの役に立ちたい、て言ってたよね？」

「…ええ」

「助けてくれたお礼がしたい、て」

「はい」

「この前のことを気にしてるんなら、本当に気にしなくていいんだよ」

霧彦の言葉に若菜は潤みかけた目で言った。

「迷惑…なんですか？」

「そんなわけないだろう。でも役に立ちたいとか、そんな考えはよくない」

「どうして？あたしは、霧彦さんに助けてもらってすごくうれしかった。だから霧彦さんに恩返しをしたいのに、そう考えるのはいけないことなんですか？」

「若菜ちゃん…」

霧彦は水を飲んだ。

「そんな大したことじゃないんだから」

「こんな話するためにあたしを呼び出したんですか？」

若菜は泣きそうな顔で霧彦を見つめた。

「いや、だから…」

「あたし…帰ります」

若菜は何もオーダーせずに立ち上がった。

呆気にとられた店員を尻目に若菜は出口へ走り、外へ出た。

「若菜ちゃん！」

霧彦が立ち上がって後を追った。

若菜は泣き顔を見られたくない一心で懸命に走った。

が、もともと運動が得意ではない若菜はすぐに足がもつれ、転んでしまう。

「きゃっ！」

「若菜ちゃん！」

霧彦が追いついた。

「無茶するから…。立てるかい？」

霧彦の目の前で転んでしまう醜態に若菜は恥ずかしさのあまりすぐに立ち上がった。

「あ痛っ！」

右足が痛む。

「どうしたんだ？どこかケガしたの？」

霧彦がすぐにしゃがんだ。

「だ…大丈夫ですから、あたしに構わないでください…」

痛みに顔を歪めながら若菜は立ち上がった。

が、すぐに足が痛み出してうまく歩けない。

「きゃっ」

「若菜ちゃん！」

痛みに倒れそうになる若菜をあわてて霧彦が支えた。

「…無理はよくないよ」

霧彦は人目も憚らずに若菜を背負った。

「ちょ…霧彦さん、あたしは大丈夫ですから。一人で歩けます」

恥ずかしさのあまり若菜は顔が真っ赤になった。

「ダメだよ。足ケガしたんじゃないの？」

「ほんとに大丈夫ですから。下ろしてください」

「大丈夫じゃない。その公園でちょっと見せて」

「でも…」

若菜の反論を待たず、霧彦は若菜を背負ったまま公園にやってきた。

「ここでいいかな…」

空いているベンチを見つけた霧彦は、そこに若菜を座らせた。

「ちょっと待ってて」

霧彦は若菜を残して立ち上がり、付近の水道を探すとそこへ走って行った。

若菜は動けないままその姿を追うしかない。

やがて霧彦は自分のハンカチを濡らし、若菜のところへ戻ってきた。

「失礼」

若菜のロングスカートを捲り、霧彦は若菜の足首を見る。

その霧彦の姿に、若菜の恥ずかしさは頂点に達した。

と同時に霧彦が自分の足に触れている現実戸惑っていた。

「いたた…」

「あ、ごめん…」

「い、いえ…」

霧彦は濡らしたハンカチを若菜の足に乗せて言った。

「軽い捻挫だね。こうやって冷やしていると少し楽になるよ」

「…ありがとうございます」

転んだ弾みで若菜の髪型も解けていた。

「ほら」

霧彦がヘアピンを取り出した。

転んだ時に落としたものだ。

「霧彦さん…」

霧彦は若菜を座らせたまま、若菜の後ろに回って髪を整えた。

「はい、こんな感じかな…」

「…どうして…」

若菜の目からぽろぽろと涙がこぼれた。

「わ、若菜ちゃん？」

「どうして、霧彦さんはそんなにあたしなんかに優しくしてくれるの？」

「若菜ちゃん…」

「そんなに優しいのに…どうして…彼女がいらないんですか…」

霧彦はふっと笑った。

「さ、帰りますよ、若菜姫」

「わ、若菜姫…?」

「家まで送るよ」

霧彦は若菜を背負おうと前に回った。

「だ、大丈夫です! あたしなら歩けますから」

「だめ」

霧彦は若菜を背負って歩き出した。

若菜は霧彦の背中に体を預けるしかなかった。

「あたし、霧彦さんに助けられてばかりですね…」

「性分だから…」

霧彦はゆっくり口を開いた。

「え…」

「困った人を見ると放っておけないんだ…。だから誤解される」

「誤解って…」

「好きな人に誤解される」

霧彦は若菜を背負ったまま園咲の家へ向かって歩き出した。

う
う
う

第22話

「ぼくには両親はいない。親戚を回ってぼくらは育てられたんだ。だからかな…ぼくらみたいに困ってる人にはついつい優しくしてしまう…。でもそんなのは本当の優しさじゃあない。

だって、そのために傷ついていく人だっているかもしれないから」足をケガした若菜を背負ったまま霧彦は語り始めた。

「だから誤解される。ぼくが人を好きになっても、その人はぼくのそんな行動が我慢できないのさ」

「霧彦さん…」

確かに、若菜も自分以外の誰かにこんなことをしている霧彦は嫌だった。

だが…

「誤解って…他にもあるでしょう？」

「え？」

「…たとえば、霧彦さんを好きになってしまう…とか」

「あははは」

霧彦は笑い出した。

「何がおかしいの？」

「だから、ぼくみたいな男を好きになる女性なんかいないよ」

「そんな…そんなことありません」

若菜は足を振った。

「お、おい」

バランスを崩しながら若菜は霧彦の背中から無理やり降りた。

当然、足に痛みが走る。

「きゃっ…」

「若菜ちゃん！」

自身を支えた霧彦の手を掴み、若菜は言った。

「きっと、今までも霧彦さんのことを好きになった人はたくさんいたはずです。」

「どうして…どうしてそんなこと言うの？」

「どうして、そんなに自分を卑下するの…？」

「若菜ちゃん、ケガしてるんだから」

「あたしなら大丈夫です。答えてください」

「若菜ちゃん…」

若菜はキッと霧彦を見据えた。

「…まいったな」

霧彦は頭をかきながら苦笑して言った。

「最初に言ったけど、ぼくが人助けをしているのは性分ではない。半ば習慣めいたものでしかないんだ。

だからぼくのしたことに對してお礼がしたいなんて、割に合わないことなんだよ」

「そんなことない！少なくとも、あたしは霧彦さんに助けてもらって嬉しかった。

今だって支えてくれて嬉しかった。

そういうふうと思うのはいけないことなの？

あたしが霧彦さんの役に立ちたいと思っちゃいけないの？」

「若菜ちゃん…」

「…あたしは…あの日からずっと霧彦さんのこと…」

ニャー！

二人の間に突然ネコが飛び込んだ。

「ミック？」

若菜はそのネコを抱き上げた。

「若菜ちゃんのネコなの？」

「え…ええ…。…って今はそういう話じゃなくて！」

だが霧彦は再び若菜を背負った。

「き、霧彦さん！」

「軽いケガだからって無理しちゃダメだよ。それに、若菜ちゃんのケガはぼくにも責任がある」

「責任だなんて…」

霧彦が自分に優しくしてくれるのは、責任を感じているからなのだろうか。

やがて、二人は園咲の家に着いた。

そんな霧彦と若菜を冴子が出迎える。

「若菜！どうしたの？」

「ちょっと転んだだけよ…。霧彦さんは大袈裟だから…」

言いながら若菜は霧彦の背中から降りた。

足が痛むが、そんな素振りを見せればまた霧彦に心配させてしまう。

「じゃ、霧彦さん…今日はどうもありがとう」

若菜は痛みをこらえながら笑顔で霧彦に挨拶し、ドアを閉めた。

「…若菜、何があったの？」

「…あたし、霧彦さんのこと…何も知らなかった」

「若菜…」

若菜はそのまま自分の部屋へと入った。

霧彦と二人きりになったのに、霧彦が自分を助けたり優しくしてくれたのは、そういう性分だからにすぎなかった。

だが、これがもし、仮に冴子が相手としたらどうなんだろう？

若菜は部屋の窓から外を見た。

霧彦が帰っていくのが見える。

今はまだ追いつけない。

が、いつか必ず、霧彦に相応しい女性になってみせる。

若菜はそう誓って窓から霧彦を見送った。

つづく

第23話

「門矢士…

写真撮影に二眼レフを使うことで特徴的な作品を次々に発表した、新進気鋭の写真家だ」

井坂深紅郎は、隣の美女・園咲冴子に説明しながら壁に飾られた写真を見た。

一人のコックが生き生きと料理をしている様をおさめたそれは、目の前で本当に料理が出てきそうな臨場感にあふれていた。

「井坂さん…私、写真はあまり詳しくないんですが、すごい迫力がありますね」

「ええ…門矢君の写真は、いずれもそんな迫力に満ちています。たとえば、これだ」

睨みを利かせるコワモテの男二人とそれとは対照的に困惑した表情の女性が写っている。

「リアリティを出すために、わざと絡まれて撮影したというまことしやかな逸話があります」

「彼にかかれば、トラブルさえも作品というわけですね…」

感嘆する冴子に井坂は頷いた。

「やあ井坂君」

二人の前に白髪に眼鏡の紳士が現れた。

「光さん」

井坂は親しげにその紳士と握手を交わした。

「おや、その方は…」

「ごぶさたしておりますわ、光栄次郎さん。いつも父がお世話になっております」

深々と頭を下げる冴子に栄次郎は温和な笑顔を見せた。

「琉ちゃんの上のお嬢さんだね。大きくなって…」

「私も驚いています。まさか光さんと井坂さんがお知り合いだとは…」

栄次郎は目を細めて頷いた。

「そうだ…紹介しよう」

栄次郎は近くに座っていた青年を手招きした。

「門矢士です」

すぐにやってきた青年は自己紹介して一礼した。

「まあ、あなたが門矢士さんですか？」

「は、はい」

冴子の美しさに少しはにかみながら士は答えた。

「ちょっと、つかさくん！」

後ろから長い黒髪の少女が駆け寄ってくる。

「なにデレデレしてるんですか」

「し、してねーよ」

「これ、夏海。客人の前だぞ」

栄次郎にたしなめられ、夏海と呼ばれた少女はすぐに頭を下げた。

「夏海なんてな…私の孫だ。…その土君と今度結婚することになったね」

「ほう、それは素晴らしい。なるほど、冴子さんの美しさに夫の浮気が気になったというわけですね」

井坂の言葉に夏海は恐縮しながら答えた。

「お恥ずかしい限りです…」

「そうそう、結婚といえば、琉ちゃんとこの来人君も今度嫁をもらうとか…」

その言葉に冴子は顔を曇らせた。

「冴子さん？」

「井坂さん、そのことで少し相談がありますの…。この後お時間いただけますか？」

「え？ ええ、喜んで」

そんな二人を見て栄次郎は頷きながら士と夏海を連れて立ち去った。

「相談というのは…？」

「うちの妹のことなんですが…」

レストランで冴子は向かいに座った井坂を凝視した。

「ははあ…もしかして、うちの須藤が関係してますな？」

「わかります…？ 実は、妹が…その…須藤さんのことが好き…みた
いで」

井坂は霧彦が若菜と電話で話していたことを思い出した。

「…のようですね」

「知ってらしたの？」

「一度、妹さんから須藤に電話がかかってきたことがありましてね、
その時須藤は「気にすることない」みたいなこと言ってました」

「そうでしたか…」

「冴子さんは、妹さんに須藤を諦めさせたいのですか？」

「…ちがいます。私は、なんとか若菜と霧彦さんをくつつけたいん

です」

井坂が息をついた。

「若菜は、今までずっと内向的でした。それが、霧彦さんを好きになってからというものの毎日が楽しそうで、姉の私が見ても綺麗になっ
ていくんです…。」

霧彦さんのことが本当に好きなんだって…」

「冴子さんはどうなんです？」

井坂が真顔で尋ねた。

「えっ…」

「うちの須藤について、です。彼は今時珍しく実直で誠実な男でし
て…逆に言えばそれしか取り柄がないんですが」

「私は恋愛対象としては見れませんわ」

霧彦の冴子への想いを知っている井坂は困惑した。

「…そうですか…。それで、私に何を？」

「協力していただきたいんです。なんとか霧彦さんの気持ちを聞く
だけでも、お手伝いしてもらえないかと」

「…わかりました。やってみましょう」

井坂の言葉に冴子は笑顔を見せた。

「ありがとうございます。：これ、私のメールアドレスなんですが
：井坂さんのアドレスも教えていただけませんか？」

「ええ、構いませんよ」

二人はアドレスを交換し、店を出た。

道すがら井坂は霧彦のことを考えていた。

「須藤：すまんな：」

つづく

第24話

平日の昼間。

左翔太郎は一人で昼食を摂っていた。

公園で食べるファストフードがいつものコースだ。

「あっ翔太郎くん！」

その姿を見てひとりの女性が走ってくる。

「亜樹子…？」

鳴海亜樹子はミニスカートの裾をおさえながら翔太郎の隣に座った。

「またこんなの食べて」

「いいじゃないか別に」

翔太郎は前に亜樹子から聞いた話を思い出していた。

「なあ、亜樹子…」

「ん、なに？」

「…いや、なんでもねえ。…照井とはあれから会ったか？」

竜の名前に亜樹子は少しはにかんだ笑顔を見せた。

「ううん…でも今度デートすることになったんだ」

「そうか…よかったな」

翔太郎はハンバーガーをかじった。

「うん…ありがとう」

「もう照井には告ったのか」

「まさか…。でもその日に言うつもり…自分の気持ち」

翔太郎は黙ってハンバーガーを食べた。

「じゃ、おれ行くわ…」

「えっ…？何よ、まだいいじゃん」

「忙しいんだよこっちは」

「何が忙しいの？…わかった、女だな」

翔太郎はふっと笑った。

「ある意味では、そうかもな…」

翔太郎は追いかけてくる亜樹子を躲して止めてあったバイクに乗った。

「じゃーな！」

「翔太郎くん！」

亜樹子の声が小さくなっていく。

翔太郎はバイクのアクセルを開きながら、考えていた。

『霧彦：おまえの言う通り、祝福するよ…。惚れた女の幸せを願ってこそ男だからな…』

翔太郎は行きつけのバー「クローバー」にやってきた。

そこには既に先客がいる。

アップにした髪型に白いスカート。

掛け値なしの美貌に翔太郎は思わず口笛を吹いた。

「…！」

その音に彼女が気付いた。

「あ、失礼…」

翔太郎はカウンターに座ってマスターに声をかけた。

「ジンさん、あの人は？」

「最近来るようになったんだけどね…詳しくは知らないんだ」

ジンさんと呼ばれたマスターはすまなさそうに頭をかいた。

「…園咲冴子よ」

美女が口を開いた。

「あ、どうも…」

「あなた、常連さんみたいだけど？」

「あ、おれ、左翔太郎…よろしく」

冴子は翔太郎を一瞥するとグラスを傾けた。

「この店、いい店ね」

「ありがとうございます」

ジンさんが恐縮している。

そこへドアが開いて霧彦が現れた。

「よ、霧彦」

翔太郎が手を挙げる。

だが霧彦の視線は冴子に注がれた。

「さ…冴子さん？」

「霧彦さん…」

冴子も霧彦の姿に目を丸くした。

「どうしたんですか？こんな所で」

「たまたま飲みたいと思ってただけよ。…でもちようどよかった。
霧彦さん、あなたに話があったの」

冴子が隣の席を勧めた。

霧彦は迷わず着席する。

「…話とは？」

「若菜のことよ…」

若菜の名前に霧彦はドキリとした。

「あの日、若菜と何があったの？」

「何もないですよ。ぼくは、ただ、ぼくのやってることは単なる性
分だと言っただけで…」

冴子はため息をついた。

「…そう」

「冴子さん、ぼくも冴子さんに話があったんです」

「何かしら」

霧彦は翔太郎を見た。

「あ、いや…また後でお願いします」

「じゃ私の話を先にしていいい？」

冴子は更にもう一杯飲んだ。

「…今度、霧彦さんの家に行きたいんだけど」

「え、ほ、本当ですか」

冴子は頷いた。

「若菜も行きたがってたしね」

「姉妹仲いいんですね」

「見てららないだけよ」

冴子は財布を取り出し、伝票を掴んだ。

「帰るわ」

「あ、じゃぼくも」

「テメー何も頼んでねえじゃねーかよ」

ジンさんと翔太郎に言われながら霧彦は冴子と店を出た。

「…で、話って？」

「…冴子さん…ぼくは…」

霧彦は唾を飲み込んだ。

「ぼくは、冴子さんが好きです…」

つづく

第25話

「ぼくは、冴子さんのことが好きなんです」
霧彦の告白に冴子は啞然とした。

と同時に井坂が言ったことを思い出した。

『須藤についてどう思いますか？』

その時は特に何も感じなかったが、霧彦は井坂に冴子への想いを相談していたのか、と得心した。

「…」

冴子は迷った。

霧彦のことは恋愛対象として考えたことはない。

が、人間としては好感の持てる人物だ。

そして、何より妹である若菜の想い人である以上、無下にできない。

「…霧彦さん…」

霧彦は冴子の次の言葉を待っていた。

「…ありがとう。あなたのような人に好きになってもらえて、嬉しいわ」

霧彦が笑顔を見せた。

「…でも、ごめんなさい」

「えっ…」

「…私は、あなたにはふさわしくないわ」

冴子の言葉に今度は霧彦が言葉を失った。

「そんな…。ぼくは本気で冴子さんのことが…」

「わかっているわ…。でも、ごめんなさい」

冴子はそのまま駆け出した。

「冴子さん…!」

霧彦が追いかけてくる。

冴子はタクシーを呼び止め、逃げるように飛び乗った。

「冴子さん…」

園咲家に戻った冴子は、茫然としたまま部屋に入った。

「どうしたんだい？姉さん」

来人が心配そうにやってきた。

「…若菜は？」

「ああ、ちょっと買い物に出かけてるけど」

「そう」

冴子は努めて笑顔を見せて、部屋へ入った。

若菜がいなくて自分のこんな姿を見られなかったことに冴子はほっとした。

霧彦に告白されたなどと、家族の誰にも相談できない。

そこまで考えて、冴子は携帯電話を取り出した。

住所録を開き、先日登録したばかりのアドレスを検索する。

あ行のためその名前はすぐに見つかった。

井坂深紅郎。

霧彦の上司だ。

冴子は迷わずメールを送った。

『お話があります。一度お時間いただけませんか』

打ち終えて冴子は、自分が井坂を頼りにしていることに気付いた。
「…私が…？」

霧彦は一人で街を歩いていた。

再びバーに戻る気にもなれず、霧彦は一軒の居酒屋に入った。

「らっしゃい！」

「一人…いいかな」

「すみません、相席になりますが…」

「構いませんよ」

霧彦が勧められた席の隣には女性が座っていた。

「あれ、須藤くん！」

「あ…」

そこにいたのは鳴海亜樹子だった。

「…鳴海…さん」

「どうしたのよ？一人？」

霧彦はしまったと思ったが、この状況で帰るわけにもいかない。

「や、やあ」

「ちょうどよかった。私ね、須藤くんに聞きたいことあったんだ」
亜樹子が自分に用事とは珍しい。

霧彦は出された生中を飲みながら亜樹子の次の言葉を待った。

「翔太郎くんのこと…なんだけどね」

「翔太郎？」

「私、何かしたのかなあって…。ちょっと翔太郎くんの態度がよそよそしいから…」

霧彦はジョッキを置いて言った。

「そんなことより、竜とはどうなんだ」

「えっ…」

亜樹子の顔が赤くなった。

「り、竜くんとは…別に」

「そうか。もし、翔太郎が気になるんなら、竜とキッチリケジメをつけるんだ」

「わ、私と竜くんが翔太郎くんに関係があるのよ」

霧彦はビールをあおって言った。

「まだわからないのか。翔太郎はきみのことが好きなんだよ。だけど、親友の竜やきみのことを考えてカッコつけてるんだ。だから翔太郎にカッコつけさせてやってくれ」

「え…ええっ！？」

亜樹子が目を丸くした。

「そんな話、私聞いてない！」

「当たり前だ。言っていないからな」

「そうだったんか…。翔太郎くんは私のことを…」

霧彦はビールのおかわりを頼むと亜樹子に向き直った。

「そのうえで鳴海さん、質問だ！」

「えっ!？」

「いま翔太郎がここにいて、きみに好きだと言ったらどうする？」

「どうするって…どうしよう!？」

亜樹子は本気でオロオロし始めた。

つづく

第26話

「わ、私は…」

亜樹子が混乱しながら必死に答えを探す様子を見て霧彦は苦笑した。
「何笑ってんのよ、こっちは真剣なんだから！」

「ごめんごめん」

亜樹子は酒を一杯飲むとグラスを置いた。

「やっぱり、ごめんなさい、かな…。翔太郎くんの気持ちに応えられないから」

霧彦は枝豆の皮を剥いた。

「それで翔太郎が傷つくとしてもか…」

「…仕方ないよ。気をもたせることのほうが残酷だし、大事なのは、私の気持ちだから」

「…難しいよな…。どんな答えしたって…、誰かが傷つくようにできてるんだよな」

「ふえ？」

亜樹子が霧彦を見た。

「何かあったの？」

「何もないよ」

「嘘だ。何もないのに一人で居酒屋なんか来るはずない」

少し考えてから亜樹子は叫んだ。

「あゝ！」

「な、何？」

「女だ！絶対そうでしょ」

「違うって」

「いや、違わない。振られたんだ、しかも」

霧彦は酒を吹き出した。

「凶星だ。そーかそーか。そりゃ一人で居酒屋行きたくなるよね」

霧彦はここで亜樹子に会ったことを再び後悔した。

「まゝでも仕方ない。仕方ないよ、うん。飲もう！今夜は飲もう！ただし、私がお付き合いするのは仕方なく、だからね！」

「誰も頼んでない」

「んなこと言っちゃって。ふられたばかりだからって私を狙ってこないでよ」

「…勘定」

霧彦は無愛想に呟いて立ちあがった。

「ちよちよちよっと、須藤くん！」

出て行こうとする霧彦を追って亜樹子が立ちあがった。

「なんで帰るのよ」

「仕方なく付き合うのなら付き合ってくれなくても構わないよ」

「冗談だって！」

言いながら亜樹子は霧彦の袖をつかんだ。構わずに霧彦は居酒屋の戸を開ける。

「離してくれないか」

「いいじゃん。お互い飲みたい気分なんだし、これも何かの縁ですよ」

「やめてくれ」

ガラッ

園咲若菜は一人で買い物に来ていた。

母親の文音に頼まれて、明日の食材の買い出しである。

スーパーで買い物を終えて帰宅途中の若菜は、道行くカップルの姿にため息をついた。

「霧彦さん…」

あの日、転んでケガをしたところにはまだ包帯が巻かれていた。

駅で落ちたときに痛めた箇所とほぼ同じ部分をまた痛めてしまったらしく、

歩く際にはまだ痛みが残っていた。

「軽い捻挫だなんて…うそつき」

霧彦の言葉を思い出して若菜は苦笑した。

その時、若菜の目の前の居酒屋の戸が開けられ、中から男女が出てきた。

「えっ…?」

若菜は絶句した。

「いいじゃん。お互い飲みたい気分なんだし、これも何かの縁ですよ」

「やめてくれ」

言いながら出てきた男は霧彦だった。

「き、霧彦…さん?」

若菜は霧彦を見た。

「若菜ちゃん…」

袖にしがみついているのは若い女性だ。

「…須藤くん、知り合いの人?」

ただならぬ霧彦と若菜の雰囲気には亜樹子が袖につかまったまま口を開いた。

『須藤くん…!?!?』

そんな亜樹子の態度に、若菜は思わずその場から駆け出した。

足が悲鳴をあげる。だがそれでも構わずに若菜は走った。

『女の人…だれ…!?!?』

若菜が走り去った後、茫然としたまま霧彦は立ち尽くしていた。

「誰？あれ。結構かわいかったじゃん」

亜樹子が固まっている霧彦に声をかける。

「…だれでもいいだろ」

「…よくわかんないけど追いかけていいの。彼女でしょ。私と一緒にいたのまずかったかな」

「彼女じゃないよ」

「あ、じゃあのひとにふられたんだ！」

「違うって」

霧彦は苛立ちながら答えた。

「ねえ須藤くん」

「なんだよ」

「さっきのひと、足ケガしてたよ。でも走って逃げるなんてよっぽどじゃない？」

「…なに？」

気がついた時には霧彦は走り出していた。

「…あ、ちょっと須藤くん、ここの払いは!？」

霧彦は答えない。

残された亜樹子は、ふうとため息をつき、また居酒屋へ戻っていった。

走る若菜は、しかし、自分の足の激痛についに走れなくなり、歩道にしゃがみこんだ。

「い、いたっ…」

無理して走ったからか、痛みのあまりすぐには立ち上がれない。

「若菜ちゃん！」

霧彦が走ってきた。

「き、霧彦さん…」

若菜は慌てて立ち上がると、再び逃げようとする。

そんな若菜の手を霧彦が掴んだ。

「は、離してください」

「待ってくれ。なんで逃げるんだ」

自分でもどうしてなのかわからない気持ちがないまぜになりながら若菜は振り向いた。

「か、彼女さん待ってますよ！あたしなんかに構ってる場合じゃないでしょ…」

「彼女…？」

若菜は亜樹子を彼女と誤解していた。

確かにそう思われても仕方のない状況ではあったが、冴子に振られたばかりの霧彦にはその誤解はかなり堪えた。

「違うよ…鳴海さんは…」

「何が違うんですか…。あたしは…あたしだって…」

言いながら若菜は霧彦から力が抜けていくのを感じていた。

「…きり…ひこさん…？」

霧彦は力なく若菜から手を離れた。

「ごめん…ぼくは最低だよ…」

こんな霧彦は初めて見た。

何か自分が傷つけてしまったのか。途端に若菜の心に後悔が芽生える。

「き、霧彦さん…！」

次の瞬間、若菜の足に再び激痛が走った。

「あうっ…！」

そのまま若菜は道に倒れこんでしまった。

う
う
う

第27話

井坂深紅郎は、自宅でワインを傾けていた。

晩酌の趣味があるわけではない。

ただ意味なく飲みたい気分になる日というのはある。

井坂にとって、今日はそんな日だった。

そして、そんな日には決まって井坂はワインを飲んだ。

ビールやカクテルも飲まないわけではないが、自宅にはストックがなかった。

時刻を見ようと井坂は携帯を確認した。

「…」

メールの着信が1通。

職場と自宅でいちいち切り換えるのが面倒なため、井坂の携帯は常にマナーモードだ。

振動もなければ音も鳴らない。

が、定期的に携帯を確認する癖のついた井坂には特に不自由はなかった。

「冴子さん…?」

メールの送り主は冴子からだった。

時間を作ってほしいというそのメールに、井坂はすぐに返信した。

『わかりました。では、明日また連絡します』

若菜は、去っていく霧彦を追いかけるため、懸命に立ち上がろうと試みた。

しかし、足の痛みがそれを許さない。

「きゃ…！」

足に力が入らない。同時に若菜は痛みに顔をゆがめ、道端にうずくまった。

「…立てない…霧彦さん…」

思わず若菜は霧彦の名を呟く。

「若菜ちゃん！」

気がつくと若菜の目の前に霧彦がいた。

「き、霧彦さん！」

若菜は泣きそうになった。

自分を置いて立ち去った霧彦が、戻ってきてくれたのだ。

霧彦は道に倒れた若菜を助け起こすと、すぐに彼女の足の状態を確認した。

「大丈夫？ 若菜ちゃん」

「だ、大丈夫ですよ」

若菜は強がって言った。

「…どうして…？」

言いながら、若菜は霧彦の表情がやはりいつもと違うことに気付いた。

「…何が？」

力なく霧彦が若菜に質問する。

「彼女さんいるのに：どうしてあたしを助けてくれるの：？」

「目の前で若菜ちゃんが歩けないってのに、それを放置するほどぼくはダメなやつじゃないよ。それに、鳴海さんは彼女なんかじゃない」

「霧彦さん…」

やはり何かあったのだ。若菜は霧彦を見つめた。

しかし霧彦はそんな若菜の視線には気付かずに、道路に手を挙げてタクシーを呼び止めた。

「え…？」

霧彦は、若菜を抱き上げると、タクシーに乗せた。

「ごめんね、送ってあげたいんだけど…」

霧彦は運転手に若菜がケガしていることを話し、ドアを閉めた。

「霧彦さん！」

今日の霧彦は明らかにおかしい。

動き始めたタクシーの窓からとぼとぼと去っていく霧彦の姿を見た若菜は、運転手に告げた。

「と、止めてください！」

まだ数メートルも進まないうちにタクシーが止まった。

「降りしてください」

啞然としている運転手にお金を払い、若菜はタクシーから降りた。

その様子に霧彦が驚いて若菜に駆け寄ってくる。

「若菜ちゃん!…どうして…」

「…ほっとけないんです…」

「…えっ…」

「こんな霧彦さん…あたし…ほっとけない」

若菜は痛む足を引きずって立ち上がった。

「だって、あたしは…あたしは、やっぱり霧彦さんの役に立ちたいから」

「やめてくれよ…。ぼくにそんな価値はない」

そう言って霧彦は後ろを向いた。

「い、痛いっ!」

若菜の声に反応して霧彦が慌てて戻ってきた。

「大丈夫か？」

「…霧彦さんは、価値のない人なんかじゃないですよ…」

「若菜ちゃん…?」

「あたしが「痛い」って言ったら、すぐに戻ってきてくれる、優しい人なんです。だからそんなこと…価値がないなんて、言わないでください」

霧彦はため息をついた。

「ぼくにどうしろと言うんだ…」

「何があつたんですか…?」

「なんでもないよ」

「あたしは、霧彦さんの役に立ちたいんです…たまには、あたしだって…」

「若菜ちゃん、ケガしてるんだから」

「でも…」

若菜のまっすぐな視線に、今度は霧彦も目をそらさずに答えた。

「…わかったよ」

霧彦は若菜に背を向けた。

だがそれは、若菜から離れるためではない。

自分を背負うためだと判断した若菜は、しかし霧彦に言った。

「あたしなら大丈夫です。一人で歩けますから。こんなケガぐらい…」

「駄目だよ。さっき倒れただろ」

「でも…」

「いいから」

背を向けたまま言う霧彦に、若菜も素直に彼の首に手を回し、体を預けた。

「さっきはごめんなさい…」

「ん…？」

「勝手に逃げたりして…」

「鳴海さんは彼女じゃないよ」

「そうやって頑なに否定するあたりが怪しいですね」

努めて笑顔で若菜は言ったが、霧彦はそれにも応じなかった。

「ほんとに違うから」

少し怒気をはらんだ霧彦の声に若菜はうつむいた。

「ごめんなさい…」

しばしの沈黙の後、霧彦が口を開いた。

「…あのさ…、実はね…」

霧彦が淡々と語り始めた。

「ふられたんだ」

「えっ…」

若菜は頭が真っ白になった。

「…きみのお姉さんにね…」

つづく

第28話

霧彦は若菜を背負ったまま言った。

「ぼくは、冴子さんに好きだと言った…。でもふられた」

「お姉様に…？」

若菜は言葉が出なかった。

霧彦のこれまでの態度から、霧彦が姉に惹かれていることはわかっていた。

だが、あまりに突然すぎる。

「来人君とうちの雪絵のことがあるのに、こんな時期に変なことになるってごめんね…」

霧彦の言葉は耳に入らない。

若菜は冴子が霧彦を拒絶したという現実を想像した。

そして、居酒屋から出てきた女のことを思い出した。

「…それで、あのひとと飲んでたんですか」

亜樹子のことを言っていると判断した霧彦はため息をついた。

「…霧彦さんは、モテますよね…。お姉様にふられても、またすぐに…」

「鳴海さんは、ぼくの親友の彼女だ」

「嘘。…そんな人となんでいっしょにいたんですか？しかも二人きりで」

霧彦は淡々と答えた。

「あれは偶然だよ。たまたま入った居酒屋に鳴海さんが一人でいたんだ」

「…信じられない」

「…それでもいいさ」

霧彦は自嘲気味に言った。

「前に言っただろ？ぼくは誤解されやすい。…だから若菜ちゃんが思うのは当然だよ」

「そんな…」

「こんなぼくは、冴子さんに相手にされなくて当然だよ。若菜ちゃんにも軽い男だっと思われても仕方ないし…。でも、別にそれでもないんだ」

「どうして…ですか」

「ぼくには価値がないからさ」

「そうやって…カッコつけてるつもりですか？」

「え…」

若菜は無理やり霧彦の背中から降りた。

足が痛むが、それを意に介せず話を続けた。

「…お姉様にふられて、悔しくないんですか？悲しくないんですか？…なんで、なんでそうやって…自分を卑下して終わりなんですか？」

「…若菜ちゃん…」

若菜は泣いていた。

「…あたしは…誤解なんかしたくない。霧彦さんが本当に優しく、あたたかい人だって、あたしは信じてる。…あたしは…霧彦さんが価値がないなんて思いたくない！」

「若菜ちゃん…」

「この前だって、酔ったあたしを送ってくれて…。さっきも、歩けないあたしをおぶってくれて…。いつも、いつもいつもあたしを助けてくれて…。こんなあたしなんかを助けてくれる霧彦さんが…価値のない人なんて…あたしは…」

言い終わる前に霧彦は若菜の頭に手を置いた。

「…ありがとう、若菜ちゃん…」

そのまま霧彦は若菜の髪を撫でて、そして指でそっと若菜の涙を拭いた。

「霧彦さん…」

「若菜ちゃん…」

霧彦は再び若菜を背負った。

「…霧彦さん…？」

返事はない。

いや、霧彦は声にならなかった。

霧彦は泣いていた。

夜道で泣いた男に背負われた女。

その霧彦の涙に若菜もまた涙がこぼれた。

「…ありがとう」

泣き笑いの声で霧彦が言った。

その声に背中を押されるように若菜が言った。

「…あたしじゃ、だめ、ですか…」

「…えっ？」

若菜は霧彦に回した手に力を込めた。

「…ハハ…若菜ちゃんお酒弱いからだめだよ」

亜樹子の代わりに付き合おうと思ったのか霧彦は言った。

「ちがいます…」

若菜は霧彦の頭に頬を寄せて言った。

「下ろしてください…」

ただならぬ雰囲気には霧彦の足が止まった。

「若菜…ちゃん…?」

霧彦は振り返り、若菜の顔を見ようとしたが、角度的に無理だとわかると、足が痛まないように慎重に若菜を下ろした。

「どうしたの…?」

若菜は少しうつむいて、それから霧彦を見つめた。

「…あたしじゃ…だめですか…?」

さっきと同じ質問を震える声で、もう一度若菜は言った。

「お姉様じゃなくて…あたしが、そばにいるのは…だめですか…?」

「若菜ちゃん…」

「あたしは…霧彦さんのそばにいたいです。ずっと、霧彦さんのそばにいたい…」

こんな時に言うのはズルイかもしれませんが…。でも、あたし、あたしは…

あたしは、霧彦さんのことが好きです…。

初めて会った日からずっと、霧彦さんのこと…好きなんです」

霧彦は言葉を失った。

今まで全く気付かなかった。いや、気付かないふりをしていた。若菜が自分に寄せる想いに今から考えれば思い当たる節は多々あった。

「ごめんなさい…あたし、嫌な女ですよ…。ふられたその日に告白するなんて…」

でも、あたし、もう抑えられないんです。霧彦さんへの気持ち…」

「若菜ちゃん…」

霧彦は若菜の顔を正面から見つめながら彼女の肩に手を置いた。

「…本気…なんだね」

若菜は黙って頷いた。

「…ありがとう。こんなぼくを好きだと言ってくれて」

でも、きみの言うように、今のぼくの状態で、きみの気持ちに応えることはできない」

「そんな…あたしじゃ、だめなんですか？…霧彦さんは、あたしが嫌いなんですか…」

「そうじゃないよ」

霧彦は、若菜の肩から手を離し、優しく髪の毛を撫でた。

「でもね、今のぼくはとても気持ちの整理がつけられない。こんな気持ちのままでは若菜ちゃんへ返事をするのはとてもじゃないけどできないよ…」

若菜の髪の毛を撫でながら、霧彦は若菜を抱きしめたい衝動にかられていた。

だが、それは若菜への愛情ではなく、こんな状態の自分を好きだと言ってくれた女性に対する衝動でしかない。

仮に愛情だとしても、そんな精神状態の自分に抱きしめられても若菜を傷つけるだけだ。

「…わかりました…。…ごめんなさい」

若菜はうつむいて答えた。

「…とりあえず、送るよ…」

「大丈夫です！一人で歩けますから」

半ばふられたような状態だと判断した若菜は、霧彦の手を振り切るように歩き出した。

が、すぐに若菜は霧彦に追いつかれ、そして背中に乗せられた。

「き、霧彦さん…？」

「言っただろ…？ケガしてる若菜ちゃんをほっとけないよ」

「でも…」

「いいから」

それ以上霧彦は何も言わなかった。

若菜は、やはり霧彦は優しくして、そして少しズルイと思いながら、霧彦に体を預けた。

霧彦の体温が若菜に伝わる。

その温度は、若菜にとって心地よいものだった。

う
う
へ

第29話

その翌日。

井坂深紅郎は馴染みのカフェで園咲冴子を待っていた。

「ごめんなさい…遅くなって」

息を切らせながら冴子がやってきた。

井坂は手を挙げて自分の位置を知らせた。

「いや、今きたところです」

「よかった」

冴子は井坂の向かいに座った。

「須藤のこと…ですね？」

「ええ…。霧彦さん、どんな様子でした？」

「特に変わったところはありませんでしたよ。いや、むしろ仕事に熱中しているような…」

冴子は水を飲んだ。

「…実は、霧彦さんから…その…」

「告白されたんですか？」

「…わかります？」

冴子は俯きがちに答えた。

「なるほど…。それで、私に相談とは？」

「…昨日、妹の若菜も帰りが遅くて…。やっと帰ってきたと思ったら、前にケガした足が更に悪化してたんです。誰とどこにいたのかと聞いても、話してくれないし…」

井坂はコーヒーを口に含んだ。

「確か、妹さんは須藤のことが好きなんでしたよね」

「ええ…」

「…須藤の気持ちはこれではつきりしました。あなたが好きなんです…。」

問題は、あなたがどう考えているか、です」

「私が、ですか…」

井坂は見透かしたような視線を冴子に送った。

「あなたが須藤を好きなら、何ら問題はありませんが…」

「それが…本当にお恥ずかしい限りですが、霧彦さんに対しては友人以上の感情を抱けないんですの…」

「では、こうなれば、あなたの願う幸せな結末とは、須藤と妹さんが結ばれるしかないようですね」

「…はい」

「しかし、それでいいんですか？ 冴子さん」

井坂の射るような視線が冴子を見た。

「あなた自身は、それで幸せなんですか？」

「何をおっしゃりたいの？ 井坂さん」

「…これだけは覚えていてください。

あなたの願いを叶えることが私の願いなんです。

…あなたは一人じゃない」

「井坂さん…」

冴子は井坂の顔を見つめた。

「一人じゃない」

そんな言葉を冴子は、とてつもなく嬉しく感じた。

同時に、冴子は胸の高鳴りを感じていた。

『あ、あれ…私…ドキドキしてる…?』

霧彦は寄り道せずに帰宅した。

雪絵が出迎える。

「おかえり、お兄ちゃん。早かったね」

「ああ」

霧彦は腰を下ろすと、雪絵に言った。

「雪絵：おまえの言った通りだったよ」

「ん？何が？」

「昨日、若菜ちゃんに好きだって言われた」

「ほんと？よかったじゃん」

雪絵はうれしそうに笑った。

「ああ、まあ、そうなんだけどね」

「何よお兄ちゃん。嫌いなのか？」

「なわけないだろ。だけどさ、今までそんな目で若菜ちゃんのことを見たことなかったからさ…」

霧彦は雪絵が運んできた食事を眺めて言った。

「…でも、好きか嫌いか、なら明らかに好きなんだよなあ」

「…だったら、今からそういう目で見てみたら？」

「え？」

「若菜さんのことを、前向きに考えなさいってことよ」

「…前向きに、か…」

井坂や冴子の相談も知らず、霧彦は考えた。

若菜の存在を、妹のような目線だったこれを改めて、一人の女性として見るのが、若菜への礼儀だ。

その結果、若菜を恋愛対象として見なければ、その時は、誰かが傷つかなければならない。

自分だけは傷つきたくない、誰も傷つけないなどというのは綺麗事ではない。

同じ頃、自分の部屋で若菜は痛めた足を眺めていた。

「あたし…好きだって言ったんだ…」

まだ一日しか経っていないが、霧彦のことを想うと胸が痛んだ。

「あたし…霧彦さんに好きだって言った…」

昨日の霧彦の顔を思い浮かべ、若菜はため息をついた。

駅で助けられて以来、霧彦のことを想わない日はなかった。しかし、あんな悲しそうな霧彦は初めて見た。

「…あたしのこと、嫌いになったかな…」

我ながら恥ずかしいセリフだったと思う。

そして、望みがほとんどないことも。

だが若菜は、このまま自分の気持ちを抑えることはできなかった。

そして、打ち明けるタイミングは昨日しかなかったと思っていた。

「…そうよ…。あたしは、間違っていない」

若菜は誰に言うでもなく呟いた。

つづく

第30話

朝。

若菜は駅のホームで電車を待っていた。

霧彦と初めて会って以来、ずっと電車を利用している若菜にとって、もはや電車通勤は習慣になっていた。

気がつくと、ホームの電光掲示板に電車遅延のお知らせが表示されている。

同時に無意識に霧彦を探してしまう自分に内心嫌気がさした。

そんな自己嫌悪に陥っている若菜は、いつもの習性から霧彦を見つけてしまう。

霧彦もまた、どこかに連絡をとっていた携帯を切ると若菜に気付いたようだ。

電車の遅延による出社の遅れの連絡だろうか。

「おはよう…」

霧彦は若菜に近づいて声をかけた。

「お、おはようございます」

ぎこちなく答える若菜は霧彦をまともに見ることができない。

同時に霧彦もまた、声をかけたもののどうしたものかと思っていた。

そんな霧彦に若菜は悲しそうな顔になった。

「ごめんなさい…あたし…」

その場を離れようとする若菜の手を慌てて霧彦が掴む。

「ま、待ってくれ…」

「え…」

「あ、ご、ごめん」

霧彦は慌てて手を離れた。

「で、電車来たよ」

霧彦は若菜といっしょに電車に乗った。

「…」

「…」

会話がない。

若菜がまたも悲しげに言った。

「昨日は…ごめんなさい…。嫌いになったでしょ…あたしのこと」

「えっ…？」

「フラれた人の心の隙間を狙うなんて…だめですよ」

「それは…」

霧彦は言葉に詰まった。

「…あたし、いけない女の子ですよ…。霧彦さんを困らせて」

「…ぼくは、若菜ちゃんをいけない女の子なんて思っていない。」

だから、気にしないで」

「でも…」

霧彦は窓の外を見たまま続けた。

「うまく言えないけどさ…。ぼくは、これでも若菜ちゃんに好きだって言ってもらえて

うれしいんだ。他人から好きだなんて言われた経験ないから」

「そんなことないでしょ…。みんな霧彦さんのこと好きですよ」
「どうかな」

霧彦の返事に若菜は口をつぐんだ。

「考えてみれば、ぼくたちは変な関係だよね…。ぼくが勝手に若菜ちゃんのことを

妹みたいに考えてた節もあるんだけどさ…」

「いもうと…ですか」

「うん…。年下だからということもあるけど、何というか…」

「…あたしは、霧彦さんをお兄様だなんて思ったことはありません」

「…若菜ちゃん、もう敬語はやめないか？」

「…え？」

「ぼくは、若菜ちゃんのこととは真剣に考えている。大事な存在だということに

変わりはないんだ。だから…」

「…友達から始めよう、とか言うんですか？」

若菜は初めて霧彦の顔を見た。

「あたしは、霧彦さんのことがずっと好きだったんです。

初めて駅で会った日から、ずっと霧彦さんに憧れて…」

「駅…？」

いぶかる霧彦に若菜は言った。

「あたし、ずっと気づいてほしかった。でも、もういいです。あたしは、霧彦さんに助けてもらったんです。あの駅で…」

「駅…」

「あたしは、線路から落ちたんです。落ちて、足をくじいてしまつて…。動けないあたしを霧彦さんが助けてくれたんです」

「…そうだったのか」

以前から、若菜とは琉兵衛に紹介される前から会っていた気がしていた。

だがそのことを若菜はずっと覚えていたのだ。

「…もういいんです。あたしは、自分の気持ちを伝えただし…」

「いいわけないだろ」

霧彦は語気を強めた。

「若菜ちゃん、ぼくはまだきみのことをほとんど知らない。

お酒に弱いということぐらいしかね。

君が何が好きなのか、趣味は何なのか、ぼくは知らない。

若菜ちゃんだってそうじゃないのか」

「…だから、あたしの気持ちは違うって言いたいんですか」

「ちがう。ぼくは、自分に、若菜ちゃんのようなひとから好きだと言われるような

価値があるなんて思ったこともないんだ。どう接したらいいのかわからないんだよ」

「そんなこと言わないでください」

若菜は少し間をおいて言った。

「あたしにも、まだチャンスはあるんですか」

「チャンスって…」

「霧彦さんは、お姉様に好きなんでしょう？ だったら、あたしに気をもたせるような

真似はしないでください」

「若菜ちゃん…」

「…来週の日曜、9時にマルダムールで待っています…。」

もし、あたしにまだチャンスがあるなら、来てください…。」

逆に、もうあたしに気持ちがないなら…、あたしも諦めます」

「…」

「時間が必要なんでしょう？」

若菜がこんな大胆な提案をしてくるとは驚きだった。

そして、若菜自身も、自らの提案に驚いていた。

「…いいよ」

霧彦の答えに、若菜は頷いた。

つづく

第31話

その日の昼休み、霧彦は井坂と共に定食屋で昼食を摂っていた。

「須藤、単刀直入に聞こう。園咲若菜さんをどう思う？」

「えっ!？」

だしぬけに井坂から質問され、霧彦は水を吹き出しそうになった。

「な、な、何ですかいきなり」

「俺の性格は知ってるだろ。回りくどいのは嫌いだし、隠し事も
つと嫌いだ。」

ハッキリ言う。俺は冴子さんから事情は聞いている」

「…どこまで知ってるんですか…」

「全てだ」

「じ、じゃあ、ぼくが若菜ちゃんに告白されたことも…?」

井坂が目の色を変えた。

「なに、そうなのか？」

「ええっ?」

井坂の反応に霧彦も驚いた。

「…そうか。なら話は早いな。で、どうするんだ」

「ぼくは…まだわからないですよ、そんなの」

「わからない、てことは、嫌いじゃないんだな？」

「そりゃ…。でも、ふられたその日に好きだって言われたら、誰だ
って判断に迷うでしょう？」

「まあそうだな」

霧彦は、朝に若菜と会ったことを話した。

「なるほど、デートか…？行くのか？」

「…わかりません」

「わからない、という答えが多いな」

「井坂さんの言いたいことはわかります。

ぼくだって、こんな状態が良いなんて思ってません」

「…冴子さんは、おまえと若菜さんが結ばれることを願っている」
その言葉に霧彦は固まった。

「冴子さんが…」

「おまえには望みはない」

「だから若菜ちゃんで我慢しろって言いたいんですか…」

「誰もそんなこと言ってないだろう」

声を荒げた井坂に霧彦は少し萎縮した。

「若菜さんがどんな人かは俺は知らん。だが、冴子さんは本気で妹である若菜さんの幸せを願っている」

「井坂さん…」

「決めるのはおまえだ。だが、これだけは覚えておけ。気持ちがいなら、気をもたせるような真似はやめろ」

「井坂さんはどっちの味方なんです」

井坂は水を飲んで言った。

「決まってるだろ。冴子さんだ」

「……わかりました」

霧彦は、井坂と冴子との間に自分では成し得なかった関係があることを悟った。

だが、それと若菜と付き合うこととは別の話だ。

どちらにせよ霧彦には時間が必要だった。

その夜、若菜もまた冴子と向かい合った。

「お姉様、あたし、霧彦さんに好きだと言ったの」

「え!？」

突然の告白に冴子は驚いた。

「…霧彦さんがお姉様のことを好きなのは知ってるわ。それでもあたしは霧彦さんが好きなの」

「…若菜」

冴子は若菜を抱き締めた。

「あなたが…よくそこまで…」

「お姉様、あたしは次の日曜日、ひとつの賭けをするの…。マルダムールで霧彦さんを呼び出したのよ。…あたしにチャンスがあるなら来て、と言ったわ…」

…でも、たぶん来ない。

…だから、もし霧彦さんが来なかったら、慰めてね…」

冴子は霧彦を想う若菜のいじらしさに強く妹を抱いた。

内気だった妹が、ここまでやるとは、霧彦への気持ちの強さに冴子は震えた。

同時に、若菜の恋をなんとか成就させてやりたいと願った。

「…私は身勝手な女ですわね」

自室で冴子は井坂に電話をしていた。

若菜から聞いた話のあらましを伝えたかったのだ。

「自分から振った男に、妹の幸せを託すなんてね…」

『冴子さん、人間とは元来身勝手な生き物ですよ』

「もしあの世に地獄というものがあれば、私は地獄行きですね」

『地獄がそこまでオープンな場所とは思いませんよ』

「井坂さん…」

冴子は、井坂との会話で気持ちが安らぐのを感じていた。

「ふふっ…井坂さんにはこんな話ばかり…掃いて捨てるほど迷惑かけて、情けないわ」

『…掃いて捨てたっていいんですよ、ぼくは』

あたたかい声色に冴子は酔った。

そして、もしかしたら若菜の霧彦への気持ちもこんな感じなのだろうかと考えていた。

う
う
へ

第32話

その日、左翔太郎は霧彦に誘われていつものバーに来た。

やや遅れて、照井竜も翔太郎の隣の席についた。

「珍しいな、おまえが呼び出すとは」

「何かあったのか？」

さてわ、こないだのいい女のことか？」

霧彦はグラスを傾け、答えた。

「好きだと言われた」

「ヒュウ♪」

翔太郎が口笛を吹いた。

「そりゃよかったな。のろけ話なら興味はない」

立ち上がった竜を制して霧彦は言った。

「さっき翔太郎が言ってた女^{ひと}じゃない。その女には振られた」

「オイオイ…」

翔太郎が呆れながら言った。

「フられてすぐに告白されたのかよ。お盛んなことだな」

「…」

霧彦の表情を見た竜はイスに座り直した。

「…で、おれたちに何をしてほしいんだ」

「ぼくに告白したのは、ぼくが好きになったひとの妹なんだ」

「オイオイ…」

翔太郎がまたため息まじりに言った。

「姉妹がらみでお付き合いとは、本当にお盛んなことだな。」

こちらら女日照りが続いてるってのによ…」

チラリと竜に視線を送った翔太郎はすぐに霧彦を見た。

「で？霧彦よ…おれが亜樹子に振られたってことは知ってるよな？
そんなおれに、女に告白されたなんて話をするんだ…。」

つまんねえ話だった時のオトシマエのつけ方考えてるんだろうな？」

「翔太郎…」

霧彦は少し間を置いて言った。

「ぼくは、…」

「知らねえよ」

「まだ何も…」

「わかってんよ。

おまえが言いたいのはぼくはどうしたらいいんだ？ だろ。

だから答えは「知らねえよ」だ」

「おれも左の答えに賛成だな…。 須藤…おまえらしくないな。 ビツ
としろよ」

竜がカクテルをあおって言った。

「そもそも、おまえはどうしたいんだ？」

「ぼくは…」

「わからない、か。

じゃヒントをやるよ。

おまえは、おまえが好きなお姉さんのほうと付き合いたいんだよね？
」

霧彦は少し迷って頷いた。

「だがおまえは振られたんだ。 だったらやる事は決まってるよね？」

「…」

霧彦は黙っていた。

「祝福だろ。おまえがおれに言ったことだぜ？好きな女と結ばれなかったら、そんな男にできることは、もうその女の幸せを思い、願いを叶えてやるしかないだろ」

竜がふ…と笑った。

「何がおかしいんだよ照井？」

「いや…知らねえとか言いながらなかなか親切だと思ってな」

「ケツ…そう言うテメーはどうなんだよ？」

「何の話だ？」

「とぼけるな。亜樹子のことだ。亜樹子とはどうなったんだ」

「…今度、ケジメをつける」

竜の言葉に翔太郎は笑顔を見せた。

「ふっ…そうこなくっちゃあな！…ってわけだ。

好きな女の幸せを願ってこそ男、てやつだぜ、霧彦」

翔太郎は霧彦の肩を叩いた。

「好きな女の幸せを願ってこそ男…」

霧彦は井坂の言葉を思い出した。

冴子は自分と若菜が結ばれることを願っている。

だが、そんな理由で若菜と付き合うのは、何か違うような気がする。

「…」

霧彦は考えていた。

だがそんな理由など若菜がいない今は見つからない。

そもそも若菜はなぜこんなに自分のことが好きなのか？

「…そもそも、その妹さんはなぜおまえが好きなんだ？」

翔太郎に同じ質問をされ、霧彦は戸惑った。

「実は、ぼくが駅で助けたんだ。」

線路から落ちて、ケガしたところをね…」

「なるほどね」

翔太郎はカクテルを一気に飲み干すと霧彦に言った。

「…で、その妹さんにチャンスはあんのか？」

「…」

「フン…。これも前におれに言ったことだがな、おまえン中でもう答え出てんじゃないの？」

「何…」

「それに気付いてないだけってこともあるぜ」

霧彦は黙っていた。

だが決めるのは自分だけだ。

若菜とどうなりたいのか。

「…わかったよ、ありがとう」

霧彦は3人分の伝票を掴んで会計に向かった。

「お、おい…」

「いいよ。おごらせてくれ」

飲み代を払って霧彦は店を出た。

「…若菜ちゃん…」

霧彦はふと若菜の顔を思い浮かべていた。

つづく

第33話

日曜日がきた。

朝。

霧彦は目を覚ますと激しい頭痛に見舞われた。

「お兄ちゃん! どうしたの?」

心配そうに雪絵が霧彦の額に手を当てる。

「熱あるんじゃない?」

「…かもな」

言いながら霧彦は起き上がると着替え始めた。

「何? お兄ちゃんどこ行くの?」

「…ああ、若菜ちゃんと会うんだ」

「若菜さん? でもだめよ。こんな熱なんだから。違う日にしてもらえないの?」

雪絵の言い分も尤もな話だ。

だが霧彦はこれ以上日を伸ばすことはできなかった。

「大丈夫だよ…」

言いながら霧彦はテーブルのパンを掴んで口に入れた。

「…何かあったらすぐに電話してよ」

「…ああ」

霧彦は家を出た。

若菜と会うとはいえ、彼女と付き合おうと決めたわけではない。

だが、その答えが必要だった。

霧彦は若菜と会うことでその答えを見つけようと思っていた。

若菜は、マルダムールにいた。

髪型は、二つの団子状にした髪を髪止めで固定したもの。

あの日霧彦に結ってもらったのと同じ髪型だった。

それに青いロングスカートを合わせた若菜は、店に15分早く着いた。

「あれ〜何してんの」

見覚えのない男が二人ニヤニヤしながら若菜に近付いてくる。

「一人？」

「…ちがいます」

言った後で若菜は、はっとなった。

霧彦が来るとは限らないのだ。

「あれ？」

お連れ様はどこかな？」

「それはオレたちでした！なぐんてね！」

男は強引に若菜の手を掴んだ。

「い、嫌っ…！」

懸命に若菜は抵抗するが男は手を離さない。

「いいじゃん。連れいないんだろ？」

「や、やめてください」

手首を掴まれたまま若菜は懸命にもがく。

その様子を男たちはニヤニヤ笑いながら連れて行こうとする。

手を払おうとしても、男の力には叶わない。

手首をぐっと掴まれ若菜は悲鳴をあげた。

「きゃああっ！」

その声に道行く人は立ち止まっても、男たちに近付く者はいない。
「へへへ…いいじゃん、付き合ってよ」

男は無理やり若菜を路肩に止めた車へ連れ込もうとする。

『も、もうだめ…』

半ば観念しかけた若菜は、しかし信じられない言葉を耳にした。

「やめないか」

不意に男の手が若菜から離れ、ありえない方向へねじ曲げられた。

「な、なんだテメーわ！」

「…その人の連れだよ」

男の手を握りながら霧彦が言った。

「き、霧彦さん…」

「…というわけだ。連れがいるんで、帰ってくれないか」

「あんだとを！」

男が殴りかかる。

霧彦はスツと身を躲し、男の腹に強烈なパンチを食らわせた。

「ぐ！」

体をくの字に曲げて男が呻いた。

その様子にもうひとりの男は慌てて逃げだし、殴られた男も走り去った。「大丈夫？ 若菜ちゃん…。間に合ってよかった」

「…霧彦さん…」

若菜はその場に立ち尽くした。

「どうしたの？ どこかケガでもした？ まさかまだ足が痛む？」

若菜の足を見ようとしゃがんだ霧彦を慌てて制し、若菜は笑顔で言った。

「あ、あたしなら大丈夫…です」

「そう、よかった」

「あの…霧彦さん…」

若菜が霧彦を見つめた。

また危ないところを霧彦に助けられた。

「…助けてくれて、ありがとうございました…」

若菜は髪を耳にかけながら言った。

「いや…」

「あたし、霧彦さんに助けられてばかり…」

「入らないか？」

霧彦は若菜を伴ってマルダムールに入った。

霧彦の向かいに座った若菜は、霧彦の様子がおかしいことに気付いた。

「霧彦さん…？」

少し顔色が悪い。

「どうしたの霧彦さん？」

「いや…大丈夫だから」

気になった若菜は霧彦の額に手を当てた。

「熱あるじゃないですか」

「知ってる」

「そんな…どうして？あたしと約束してたわけでもないのに…」

「…そうだね。理由を知りたくて来たんだ」

言いながら霧彦はだんだん気が遠くなっていった。

「き、霧彦さん！？」

そのまま霧彦はテーブルに突っ伏すように倒れてしまった。

「き、霧彦さん…！」

つづく

第34話

「う…」

霧彦が目を覚ますと、見覚えのない天井が見えた。

「あっ目が覚めました？」

枕元では若菜が心配そうに覗きこんでいる。

「ああ…若菜ちゃん」

体を起こしかけた霧彦を慌てて若菜が押さえた。

「まだ寝てたほうがいいですよ」

「すまないね…」

「いえ…」

若菜はタオルを絞って霧彦の額に乗せた。

「若菜ちゃんが運んでくれたのか？」

「マルダムールの人がタクシーを呼んでくださったんです…」

若菜は言いながら座り直した。

「うふふ…」

「どうした？」

「あたし、嬉しいんです…。やっと霧彦さんの役に立てるって…」
若菜は笑顔を見せた。

「若菜ちゃんに迷惑はかけられないよ」

霧彦はベッドから起き上がった。

「あっ霧彦さん…」

慌てて若菜が遮る。

「世話になったね。でもぼくならもう大丈夫だから」

「だめですよ。まだ熱も下がってないんだし、横になってください」

「しかし…」

「いいんです。今まで霧彦さんに助けてもらったことを思えばこんな迷惑の内に入りませんよ」

「若菜ちゃん…」

霧彦を支える若菜の両手に力がこもった。

「お願い…。そばにいさせて…」

「…若菜ちゃん…」

若菜の目が潤みかけている。

その表情に霧彦は若菜をいじらしく思った。

「…わかったよ。でも雪絵に連絡だけはさせてくれないか」

「それならもう来人が済ませてます。雪絵さんはあたしに任せてくださるそうで…」

「ふっ…逃がさない…ってわけだ」

「霧彦さん…」

「冗談だよ。ぼくはどこにも行かない。まあ…行けないね」

霧彦は横になった。

「じゃ、あたしは…」

「ここにいてくれ」

霧彦の言葉に若菜は満面の笑みで頷いた。

「はい…」

やがて寝息を立てる霧彦を見て若菜は部屋を出た。

水を取り替えるためだ。

「どうなの？霧彦さんは」

廊下では冴子が待っていた。

「お姉様…」

「私は何もできないけど…」

「…やらなくていいわ」

「ふふっ…でしようね」

冴子は笑って若菜の肩を叩いた。

「若菜…。がんばるのよ」

「うん…お姉様」

若菜はすぐに水を取り替え、食事を持って霧彦の待つ部屋へ戻った。

その気配に霧彦が目を覚ました。

「あ、ごめんなさい…起こしてしまって」

「いや…ちょっと眠ってしまってた」

「でもちようどよかった。」

お粥を作ったんです。

食べられるかな…」

霧彦は体を起こして器を取ろうとしたが、若菜は、器ではなくお粥を乗せたスプーンを霧彦に向けた。

「え…」

「あっ…ごめんなさい…あたし…調子にのって…」

若菜は慌てて器を霧彦に渡し、霧彦もそれを受け取って食べ始めた。

「おいしいよ。ありがとう」

「いえ…。あの…霧彦さん…、早く良くなってくださいね…」

「ふ…」

霧彦はつい顔をほころばせた。

「どうしたんですか？」

「いやね…ぼくたちって、何か特別なことを話そうとすると、いつもぼくが普通じゃない状態になってるなって思ってる」

「…そうですね」

霧彦につられて若菜も笑顔で応えた。

「若菜ちゃんはいいい人だね…」

「そ、そんなことないです」

「チャンスがあるのかって聞いたことがあったね」

霧彦の言葉に若菜が固まった。

「…ぼくの風邪が治ったら…また、会える…？」

「えっ…」

若菜は何を言われたのかわからなかった。

「若菜ちゃんに会いたいんだ」

「霧彦さん…？」

霧彦は、器を枕元に置いて、そっと若菜を抱き寄せた。

「あ…」

突然のことに若菜は動けない。

それでも構わずに若菜を抱いた霧彦は聞いた。

「また…会える？」

若菜は頷くしかなかった。

「はい…」

つづく

第35話

熱の下がった霧彦は、迎えにきた雪絵に付き添われて園咲家を後にした。

その姿を見送りながら若菜は霧彦とのできごとを思い出していた。

「あたし…」

窓際に肘をついて、ついつい顔がゆるんでしまうことを自覚しながら、若菜は霧彦を想った。

「何かいいことあった？」

冴子が話しかける。

「ええ…」

答えてからしばらくして若菜はまた顔がゆるんできた。

「うふふふ…」

「何何？霧彦さんと何かあった？」

「…また会える？って…」

若菜の顔が更にニヤニヤしてきた。

「そう！よかったじゃない若菜！」

冴子は素直に若菜の言葉に喜んだ。

「ほんとにそう思ってくれるの？」

「当たり前じゃない。私にとって、これ以上ない喜びだわ」

冴子の言葉に若菜は思わず涙ぐんだ。

「よかったわね。…本当によかった…」

「ありがとう」

冴子は若菜を抱き締めながら言った。

「でも、まだこれからよ。霧彦さんからまだもらってない言葉があるでしょう？」

そうなのだ。

まだ霧彦からは好きだと言ってもらっていない。

ただ「会えるか？」と言われただけなのだ。

「でも若菜、チャンスは確実に若菜にあるわ。だからがんばるのよ！」

「うん」

若菜は力強く頷いた。

「そうですか！それはよかった」

冴子からの電話を受け井坂は笑って答えた。

『ええ、ありがとうございます』

「冴子さんの肩の荷もこれで一段落ですね」

『…であればいいんですが…』

「ん？まだ何か心配ごとが？」

井坂の問いに冴子は続けた。

『まだ若菜は霧彦さんから好きだと言われてないんです』

「それはそうでしょうね。まだ須藤自身も気持ちに完全な整理がついたわけでもないでしょうし」

井坂の言葉に冴子は得心した。

『しかし、それでは若菜はいつまで待てば？』

「ご安心ください。須藤は自分の気持ちに気付いてないだけですから」

『はい』

「ところで冴子さん…」

井坂は言葉を切った。

『はい？』

「これは私の個人的な感情ですから、無視していただいても結構ですが…」

『そんな、無視だなんて…』

冴子は心臓が高鳴るのを感じた。

「須藤と妹さんの関係が良好なものになりつつありますが…、私としては、これからも冴子さんの良き相談相手でありたいと思います」

『まあ…』

冴子は嬉しかった。

もとより、これで井坂と別れてしまうのも惜しいと冴子は考えていた。

それだけの価値がある男であり、魅力があった。

そしてそれは、井坂としても同様であり、冴子に対して友人以上の感情を抱きつつあった。

そんな二人は、どちらからともなく次に会う機会を切り出していた。

霧彦は自宅で雪絵に言った。

「…若菜ちゃんのことなんだけどさ…」

「ん？」

「…彼女を抱き締めた」

「わぁお！」

雪絵はうれしそうに笑った。

「いきなり穏やかな話じゃないね。じゃ、付き合うの？」

「…そうするつもり」

「何よ、浮かない表情ね」

霧彦は茶を入れながら答えた。

「…若菜ちゃんのことを好きなのかどうかは、まだわからない。
でも、あの時はとても若菜ちゃんが愛しく思えて、また会いたいと
…」

「それが恋じゃん。だったらやることはひとつだよ！」

「え…」

「決まってるじゃん。若菜さんに好きだって言うの。いつまでも気
を持たせるなんてよくないよ」

霧彦は考えていた。

まさか若菜に好きだと言う日が来ることになるとは。

それに、冴子のことが吹っ切れたわけでもない。

もしかしたら、誰も傷つけないという打算的な感情が働いて若菜を受け入れようとしている可能性とて、ないではないのだ。

どちらにせよ、会いたいと思ったのは事実。

ややあって、霧彦は若菜に電話をかけた。

『は、はい…』

緊張した様子で若菜が電話に出た。

つづく

第36話

翌日。

若菜は仕事を終えて駅にいた。

今日は仕事の後で、霧彦と食事に行く約束だった。

昨日霧彦から誘われたのだ。

膝下のスカートはいつもより少し短いものの、若菜の清楚な雰囲気
を損なうほどではなかった。

「や、やあ」

少し緊張したように霧彦がやってきた。

「霧彦さん…」

若菜は仕事帰りの霧彦に見とれた。

幾度となく出会っているはずなのに、霧彦の姿はいつも違って見える。

そんな霧彦の姿に若菜はドキドキした。

「い、行こうか」

霧彦は若菜を伴って歩き出した。

「若菜ちゃんは、何か食べたいものとかある？」

「あ、あたしは…何でも…」

「そう…」

霧彦は若菜を連れてイタリア料理の店に入った。

その系統の店特有の洒落た雰囲気が若菜を包む。

「ここ…たまに来るんですか？」

「いや、初めて。一度来てみたいと思ってたんだけど、一人じゃなかなか入れなくてね」

若菜は頷いた。

「…うれしい」

「な、何が？」

「そんな最初の場所に行く時にあたしを選んでくれて…」

若菜は頬を赤らめて言った。

「若菜ちゃん…」

それから二人は、他愛もない話をしながら食事をした。

若菜にとっては、霧彦といっしょに居られるだけでうれしく、その様子は霧彦にも伝わっていた。

「…若菜ちゃん、この後まだ時間あるかな？」

「え？ええ…」

「ちょっと歩きながら話そうか」

霧彦は、若菜と駅まで歩き、自宅のある駅まで電車に乗った。

電車を降りた霧彦は、若菜と歩き始めた。

付近の公園に入った霧彦は、ベンチに腰かけた。

あの日、若菜の髪を結ったあの公園だ。

「若菜ちゃん…、ごめんね、こんな所で」

「ううん」

「ぼくの気持ちをハッキリさせておこうと思ってね…」

若菜は胸の高鳴りを感じながら霧彦の隣に座った。

「若菜ちゃん、ぼくは、確かに冴子さんが好きだった。

でも冴子さんに振られたから、そのかわりに若菜ちゃんを選ぶとかじゃないんだ」

若菜は黙って頷いた。

「冴子さんは、若菜ちゃんの幸せを願っている。でも、そのことで

若菜ちゃんと付き合うのでもない」

霧彦は若菜を見つめた。

「ぼくは、若菜ちゃんの優しさに惹かれたんだ。熱を出したあの日、ぼくはとても安らかな気持ちになった。

…ぼくは、若菜ちゃんに求めている安らぎを見つけた」

「霧彦さん…」

若菜はその言葉に笑顔を見せながら、霧彦の言葉の節々に冴子の名が挙がることに軽い嫉妬を覚えた。

「…ありがとう、霧彦さん」

正直なところ、霧彦はまだ冴子を吹っ切ったわけではないのかもしれない。

だが若菜にとっては、どちらでもよかった。

「…お姉様のこと、あたしが忘れさせてみせる」

若菜は霧彦の首に手を回した。

「霧彦さん…好き…」

若菜はそのまま目を閉じて霧彦の唇に自らの唇を重ねた。

「…！」

霧彦も、若菜の腰に手を回し、二人はそのまましばらく抱き合った。

同じ頃、井坂は冴子と会っていた。

「妹も霧彦さんとうまく行きそうですし、これも井坂さんのおかげですわ」

冴子はグラスを傾けながら言った。

「やめてください。私は何もしてませんよ」

「いえ…。井坂さんがいなければ、私は…」

「冴子さん、私は、ただあなたの力になりましたただだけですよ」

「井坂さん…」

井坂の言葉が冴子には心地よかった。

「冴子さん…、私は少し酔っていますが、今から言うことは、お酒のせいではありません…」

冴子は意味なく身を固くした。

「…私は、あなたとずっと一緒にいたい」

「井坂さん…」

冴子の目から自然と涙があふれた。

「ふ…少々驚かせてしまいましたね…。
いや失礼。」

この話は忘れていただいて構いません」

席を立とうとする井坂の手を冴子が掴んだ。

「…お待ちになって」

「冴子さん？」

「私たちは、お互い奇妙な巡り合わせでしたね…。

でも、今は霧彦さんと若菜に感謝しています。

だって、若菜が霧彦さんに恋をしたから井坂さんに出会えたんですもの…」

冴子の言葉に井坂は座り直した。

「私は、井坂さんに会えたことを運命だと思ってますの…。

…これからも、私をお願ひします」

そう言って冴子は深々と頭を下げた。

「は、はい」

恐縮したように井坂が答えた。

つづく

第37話

あれから若菜は毎日霧彦と同じ電車に乗って通っている。

もちろん、日によっては霧彦がいないこともあったが、それでも若菜は電車で通勤をした。

「若菜ちゃん」

霧彦が若菜に気付いて声をかけた。

今日はいっしょに行けると思っただけで若菜は嬉しくなった。

頬を赤らめて若菜は霧彦を見つめる。

「あんまり見ないでくれる…かな」

照れくさそうに霧彦が言った。

「す、すいません…。あたし…」

若菜がやはり照れながら言った。

「それから、もう敬語は、やめないか？」

「は、はい…」

「ぼくは、若菜ちゃんの自然な姿を見たいんだ」

霧彦の言葉に若菜は頷いた。

「あの…じゃ、あたし…敬語…やめます…じゃなくて…やめる…」
「無理しない程度で構わないからね」

霧彦に言われて若菜はまた顔が真っ赤になった。

そんな若菜を霧彦は再びいじらしく思った。

昼休みに霧彦は、井坂に呼び出された。

「昼飯、どうだ？」

「エエ、いいですね」

二人はいつもの定食屋で昼食を摂ることにした。

「…おまえ、妹さんと付き合うことにしたんだって？」

「もう耳に入ってるんですね…」

「ふっ…それだけ俺と冴子さんの仲が親密だってことよ」

それはその通りだろう。

だが、霧彦にはその事実を隠さない井坂に好感が持てた。

「少し…妬けますね」
それも本心だった。

「…悪いな」

井坂は真顔で言った。

「須藤：俺はおまえに感謝しているんだ。
おまえが冴子さんとの繋がりを作ってくれたから…」

井坂の言葉に霧彦は苦笑した。

「皮肉にしか聞こえませんかよ」

「…それもそうだな」

霧彦は思った。

井坂のこの裏表のない性格が、まっすぐな冴子と合致したのだろう。

「…おまえ、もう冴子さんのことはいいのか？」

「よくないですよ…そりゃ」

霧彦は出された料理を食べながら言った。

「でもね、好きな女の幸せを願ってこそ男、でしょ。

よくでは冴子さんを幸せにはできないなら、他の誰かにお願いする
しかないでしょう」

「こいつはプレッシャーだな」

井坂も食事の続けながら答えた。

「…妹さんのことだけど…」

「冴子さんが願っているからくつついたわけじゃありませんよ」

霧彦は時計を見た。

まだ1時まで15分ある。

「最初は、ぼくは若菜ちゃんにチャンスをあげたかったんです。

ぼくは冴子さんにはその機会すら与えられずにふられましたからね。でも、若菜ちゃんと触れ合ううちに、彼女の持つ優しさに惹かれていく自分に気がついたんです」

「なるほどな……。そうならば断る理由はない、か」

「節操のない言い方をすれば、そうですね」霧彦はあっさりと認めた。

「だが、安心したよ。少なくとも、妹さんと無理して付き合うわけではないようだからな」

「それは、間違いありません」

二人はそれから食事を終えて会社に戻った。

「あれから霧彦さんとはどう？」

冴子が帰宅した若菜に尋ねた。

「うん……。順調よ」

そう答えた若菜の顔は満ち足りた笑顔だった。

「あなた、本当に霧彦さんが大好きなのね」

「や、やだ……」

顔を真っ赤にして若菜は俯いた。

「ちょっぴり妬けるわね」

「ちょ…何言ってるのよお姉様…。そういうお姉様こそどうなのよ？」

若菜に突っ込まれ、冴子はドキツとした。

「霧彦さんから聞いてるわ。…霧彦さんの上司の方と良い関係だつて」

「ば、ばかね。井坂さんは、ただの相談相手よ」

「何の相談？…もしかして、あたしたちのこと？」

バツの悪そうな顔で冴子は頷いた。

「お姉様…」

「ほ、ほら、井坂さんは霧彦さんの上司だから、いろいろ知ってるかな、て…」

「ありがとう、お姉様」

思いがけない若菜の言葉に冴子は顔を上げた。

「あたしと霧彦さんのことで、お姉様にはいろいろ苦勞をかけたと思うの…。」

でも、これからは、自分の幸せを考えて」

「若菜…」

「あたしは、霧彦さんといっしょにいられて、とても幸せなの。それはお姉様のおかげだと思ってる。」

だから、今度は、あたしがお姉様の幸せを応援する。
…お姉様にも幸せになってほしいから…」

「若菜…」

冴子は、若菜を抱き締めた。

あの若菜が、自分のみならず姉の幸せを願う…。

冴子は再び、若菜を成長させてくれた霧彦に感謝した。

つづく

第38話

日曜日。

今日も霧彦は若菜と会っていた。

マルダムールとは違う店で食事をして、二人は歩き出した。

その日の若菜は、例によって団子状にまとめた髪型におなじみのロングスカート。

だが若菜に惹かれつつある霧彦には、その姿が今まで以上に眩しく見えた。

「若菜ちゃん…」

「ど、どうしたの？」

霧彦の視線に気付いた若菜がドギマギしながら答えた。

「あ、いや…可愛いなあと思って…」

「や、やだ…」

若菜は顔を真っ赤にして俯いた。

だが若菜は満更でもなかった。

あの霧彦とデートをしている自分に若菜は酔った。

「あ、ありがとう…」

しかしまだ霧彦と会うのは緊張する。

何か失礼なことを言ってしまったのだろうか、などと考えてしまうのだ。

そして、霧彦の気持ちが自分から離れていったらどうしよう、と考える。

「霧彦さん…」

若菜は歩きながら霧彦を見た。

「ん？」

「…あたしのこと…好き？」

「な、なんだよ…」

霧彦は驚いたように言った。

「…ごめんなさい…でも、だってあたし…」

若菜はまた目を伏せた。

「…好きだよ」

霧彦はそんな若菜に笑って答えた。

「え…」

「ぼくは、若菜ちゃんが好きだよ」

初めて霧彦の口から自分のことが好きだという言葉が出た。

「霧彦さん…」

若菜はこぼれそうになる涙を抑えて笑った。

そして、霧彦にとってもそれは事実だった。

若菜がかけがえのない大切な存在になっている事実は、もはや揺るがない。

「あの…あたしの目を見て言ってください…」

「ええっ？」

「だって、あたし霧彦さんに好きだって言われたことなかったから…」

霧彦は少し咳払いをすると、若菜に向き直って言った。

「ぼくは、若菜ちゃんのことが好きだよ」

「うれしい…」

若菜は心底うれしそうな笑顔を見せて言った。

「よかった」

「…だって、ずっと霧彦さんとこんな関係になりたいって思ってたんですもの」

不意に若菜が真剣な顔つきになった。

「井坂さん、てどんな方？」

「井坂さん？」

「あたしたちのことでお姉様が相談してたらしいの…。で、あたしね…。お姉様、井坂さんのこと好きなんじゃないかって」

霧彦はふっと笑った。

「もしそうなら、素晴らしいことだよ」

「え？」

「井坂さんは、ぼくの見てきた人間の中でも最高クラスの人間だ。もっとも、女性にはもともとモテる人でもあるけどね」

「井坂さんはお姉様をどう思ってるのかしら」

「大丈夫。井坂さんは冴子さんが好きだよ」
その答えに若菜は顔をほころばせた。

「よかった…」

「井坂さんなら、冴子さんをきつと仕合わせにしてくれる…」

言いながら霧彦は、冴子に対する自分の想いを確認していた。

そんな霧彦の気持ちを知ってか知らずか、若菜が心配そうな顔を向けた。

「霧彦さん…お姉様のこと…」

「なんだよ、若菜ちゃんは心配性だね」

「…でも…」

「ぼくが仕合わせにすべきなのは、冴子さんじゃなくて若菜ちゃんだよ」

「ほんと…?」

若菜は霧彦を見つめた。

「そうだとしたら…あたしはうれしいな…」

「そうだよ」

「無理してない?」

「してないよ」

若菜は微笑んだ。

そんな若菜の肩を霧彦は抱いて、若菜もまた霧彦に寄り添うように歩いた。

「ただいま」

帰宅した若菜を冴子が出迎えた。

「あら、早かったわね」

「うん…あたしは、もう少し一緒にいたかったんだけど…霧彦さんが帰りなさいって」

「それは若菜を大切に想ってるからよ。幸せそうで安心したわ」

その言葉に若菜は笑顔を見せた。

「そうかな…。でも、あたしはずっとそばにいたいな…。…ってあたしの話はいいの。

ねえお姉様…。井坂さんのことだけど…」

井坂の名前に冴子が反応した。

「な、なあに？」

「井坂さんのこと、好きなんでしょう？」

「…前に言ったでしょ？井坂さんはただの相談相手よ。

私たちは、これぐらいの距離感がちょうどいいの」

「あたし、今日霧彦さんから聞いたわ。女性にモテる方らしいじゃない」

「そう…」

平静を装って冴子は答えた。

だが井坂の態度や物腰から、それはよくわかっていた。

「井坂さんを他のひと狙ってるかもしれないわよ」

「…」

「他のひとに取られてもいいの？」

「いいわけないでしょ！」

ヒステリックに冴子は叫んだ。

「私だって…井坂さんのこと…」

「だったら…」

「若菜…」

「あたしね、こうやって他の男性のことを気にしてるお姉様初めて見たの…。

あたしと違って、いつも男性に人気のお姉様が、初めて他の男性を気にしてる。

井坂さんは霧彦さんも信頼してる方だわ。

あたしは会ったことないけど、あたしはお姉様を応援する」

若菜は冴子をじっと見据えた。

「ふっ…言うようになったわね、若菜」

苦笑まじりに冴子が言った。

が、冴子はそれ以上は何も言わずに自室へと入っていった。

つづく

第39話

井坂深紅郎は、その日の仕事を終え、誰も待つ者のいない部屋に帰宅した。

これまで特に孤独を感じたことは少ない。
だが、最近の井坂は違っていた。

「園咲冴子…」

井坂は、冴子と直接顔を合わせる回数もそうだが、メールなどの連絡を取り合う回数が増えてきていることに気付いた。

そして時間さえあれば冴子から過去にきたメールを見ている。

「ふっ…」

井坂は苦笑した。

こんな感覚は久しぶりだ。

「まさか俺がな…」

そんなことを考えていた矢先、携帯電話が着信を知らせた。

例によってマナーモードだが、携帯画面を確認していた井坂は、ディスプレイに表示された着信を知ることができた。

「冴子さん…」

その発信者の名前を見た井坂は迷わず電話を取った。

『井坂さん?』

「はい」

冴子の声色が緊張している。

井坂は椅子に座り直した。

『私…』

冴子が言いかける前に、井坂が口を開いた。

「会いませんか」

『…!』

何の脈絡もなく告げた言葉に冴子が電話の向こうで絶句したのが井坂にはわかった。

だが、その言葉は冴子も望んでいるはずだ。

井坂には確信めいた期待があった。

『…いつ、ですか…?』

「今からです」

『それは無理ですわ。私は…』

「…私は、何です?」

井坂はたたみかけた。冴子のことを常に考えている井坂は、今まさに冴子に会いたいと思っていたのだ。

「…冴子さんに会いたいんです」

『井坂さん…』

「5分でもいい…。会ってお話しませんか」
『…』

冴子の答えに間があいた。時計を確認しているのだろう。

『わかりました。どこに行けばいいでしょう？』

「クローバー、というバーがあります。そこで待っています」
『クローバーですね…』

冴子の言葉を待つて井坂は電話を切った。

支度を済ませ、井坂はドアを開けクローバーを目指す。

そして、冴子もまた、クローバーへとやってきた。

ほぼ同じ時間に二人はバーで顔を合わせた。

「すみません、冴子さん。こんな時間に…」

「いえ…井坂さんは強引ですね」

「…会いたかったんですよ、冴子さんに」

「…井坂さん」

冴子は熱っぽく井坂を見つめた。

顔もほてっているような気がする。

「私…」

「冴子さん、単刀直入に言います。あなたが欲しい」

井坂の言葉に冴子は息をのんだ。

「…そんなことを言うために、私を」

「…いけませんか」

「いけませんわ…。だって…他の方が見てる」

井坂は周囲に目を配った。

マスターのジンさんが慌てて目を逸らす。

「ふっ…そもそも私に電話をしたのは冴子さんではありませんか？」

「それは…井坂さんとお話したかったからですわ」

「どんな？」

「…」

「私は自意識過剰とかよく言われます。一種のナルシストかもしれない。

ですから、当て外れなこともあります。
が、それでも敢えて言います。

…冴子さん、あなたも同じ気持ちではありませんまいか？」

自らの心を見透かされたかのような井坂の言葉に冴子はふと我に返った。

「何を根拠に…？」

「あなたがここにいる…それだけでは理由になりませんか」

冴子は微笑を浮かべた。

「大した方ね…井坂…深紅郎さん…」

冴子の笑みが井坂を貫いた。

「でも私をそんな安い女だと思っていらしたとは…」

さっきまでと違う冴子の様子に井坂はたじろいだ。

「…安い女だとは思っていない」

「そうかしら？女が自分に振り向くなんて思うのは、男の傲慢ではなくって？」

先ほどまでとは異なり、冴子の瞳に力が宿っているのを井坂は感じた。

「井坂さん、私の気持ちをお話します。私も井坂さん、あなたが欲しい…でもこれだけは覚えておいて。私はあなたの物にはなりません」

井坂の表情から余裕が消えた。

「で、では…」

「私はあなたの物にはなりません、あなただって私の物になる必要はありません。」

お互いにお互いを想う気持ちが大切なのではなくって？」

井坂は出されたカクテルを飲んだ。

「深紅郎さん、私が言いたかったのは、今度は心を奪いあうことなくお会いしましょう、ということです。」

なぜなら、私もあなたも、既にたがいを想っている…違いますか？」

「冴子さん…。それは…私と同じ気持ち、ということですか？」

「あなたを既に深紅郎さんと呼んでいることが証明になりませんか？と？」

すっかり主導権を冴子に握られた形になった井坂だが、その実、満更でもない感情も芽生えていた。

「…冴子さん、改めて、交際を申し込みます」

「では、お互いに敬語はやめましょう」

冴子は微笑を見せた。

それにつられて井坂も笑みを浮かべた。

「乾杯」

冴子がグラスを傾けた。

小気味いい音が店内に響いた。

う
う
へ

第40話（前書き）

今回で最終回です。

第40話

来人と雪絵の結婚式の段取りは順調に進んでいた。

そんなある日、園咲家の夕食の席で冴子が不意に立ち上がった。

「お父様、お母様、ちょっとよろしいかしら」

琉兵衛と文音は箸を止めて冴子を見た。

「私、結婚したい方がおりますの」

「…ほう」

琉兵衛が目を細めた。

「それはどなたかしら？」

「井坂深紅郎さんという方で、とても素敵な方ですわ…一度、お父様にご紹介しても？」

「もちろん、大歓迎だよ冴子」

琉兵衛は顔をほころばせて言った。

「それにしても、おまえが男を連れて来るとはな…」

「あらお父様、私が同性愛者だと？」

「おまえと結婚したいという男はたくさんいたが、おまえが結婚したいという男は初めてでな」

「まあ。私はそこまでモテる方ではありませんわ」

笑いながら答える冴子を見て、若菜も同じことを考えていた。

「ところで若菜、あなたも結婚したい方がいるのよね？」

「け…結婚だなんて…」

「それは霧彦君のことかね？」

琉兵衛が若菜を見た。

「…はい」

若菜は照れながら答えた。

「ふふ…近い者同士だな…。偶然とは恐ろしいものだ」

「お父様、あたしは偶然とは思えません」

若菜が立ち上がって言った。

「来人が雪絵さんと良い仲になったのも、あたしが霧彦さんを好きになったのも、お姉様が井坂さんと付き合うようになったのも…偶然ではないと思うの」

琉兵衛はその先の言葉を理解した。

そのうえで琉兵衛は尋ねた。

「では…何かな？」

春。

霧彦は若菜と桜を眺めていた。

「ねえ霧彦さん……」

霧彦に寄り添いながら若菜は言った。

「あたし、霧彦さんと会えてよかった」

頬を赤く染めていう若菜をいじらしく思いながら霧彦は優しく抱き寄せた。

「ぼくもだよ、若菜ちゃん」

「……あたしね、思うの。あたしがあの日駅でケガした時のも、何もかもがそうなんじゃないかって」

「何が？」

霧彦の言葉に若菜がいたずらっぽく笑った。

その笑顔に霧彦は、自分がかつて冴子に恋していたことをふと思い出した。

その表情に若菜が心配そうに尋ねた。

「…霧彦さん？」

「ハハ…ごめんごめん」

笑いながら霧彦は、冴子が自分の中で思い出になったことを理解していた。

「冴子さん、飲み物はワインでよろしいですか？」

自分の部屋で寛ぐ冴子に、井坂がグラスを持ってきた。

「いただくわ」

冴子が笑って応える。

「深紅郎さん、この間ね、うちの若菜がこんなことを言ってたの」

「なんです？」

「自分が霧彦さんと知り合ったのも、私があなたと深い仲になったのも偶然ではない、と」

「ほう」

井坂は自分のワイングラス越しに冴子を見ながら言った。

「もしも神様がいたとして、そういう出会を操作しているとすれば、私たちの関係はまさにそうだと言えるのではなくって？」

井坂はその言葉の恥ずかしさに苦笑いした。

その顔に冴子も笑みを漏らす。

「笑ってしまうわよね」

「ですが、的を得た意見でしょう。少なくとも私は信じますよ」

園咲家の昼下がり。

琉兵衛は紅茶を手に庭へ出た。
猫のミツクが昼寝をしている。

それを眺めて琉兵衛は若菜の言葉を反芻していた。

「あなた、若菜の言葉を考えてたでしょ」

背後から文音が言った。

「ふふっ…母さん、子供はいつ、大人になるのかな…？」

「さあ…そもそも大人の定義って何かしら？ 私たちも大人ではないかもしれないわよ」

頷く琉兵衛を見て文音は続けた。

「でも、親が子の世界に踏み込めなくなるのは、子が異性への愛に目覚めた時…。それは間違いないわ」

「ふっ…わあっはは」

不意に琉兵衛は笑い出した。

「若菜の言った通りかもしれないな。うちの子供たちが揃って生涯の伴侶を見つけたのは、偶然ではあるまい」

「そうね……。私とあなたのように……」

文音の言葉に少し照れながら琉兵衛は言った。

「そう……運命……だな」

庭に風が吹いた。

その風にミツクが微かに嘶いた。

終わり

第40話（後書き）

長い間ご愛読ありがとうございました、「チェンジ・スタッグビートル2」は今回で完結です。

この作品は、「仮面ライダーW」の登場人物である須藤霧彦と園咲若菜の名前を借りて構築した作品です。

各方面より賛否両論あったかと思いますが、無事に完結させることができてよかったと思います。

もちろん反省点もあります。

この手の作品の場合、適度な長さというものがあり、前作「チェンジ・スタッグビートル」の全20話というのがほぼ理想的な長さなのですが、その2倍の長さになってしまいました。

また、R15と言っておきながら全くそれらしい描写がなかったのも看板に偽りあり、です。

霧彦や若菜の心理描写も、少し書き込みが足りなかったかもしれない。

これらの反省を踏まえて、次回作（あれば、の話ですが）に活かしたいと思います。

この作品に少しでも立ち止まってくださったみなさん、拙い文章にお付き合いくださり、ありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3739/>

チェンジ・スタッグビートル2～思い出に変わるまで～

2011年11月14日21時38分発行